

42186

教科書文庫

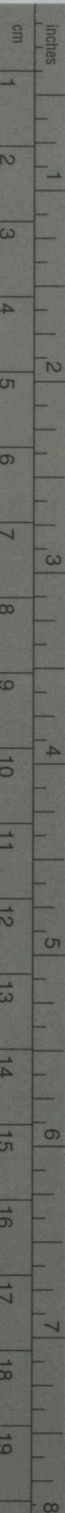
4
810
42-1923
20000 39915

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

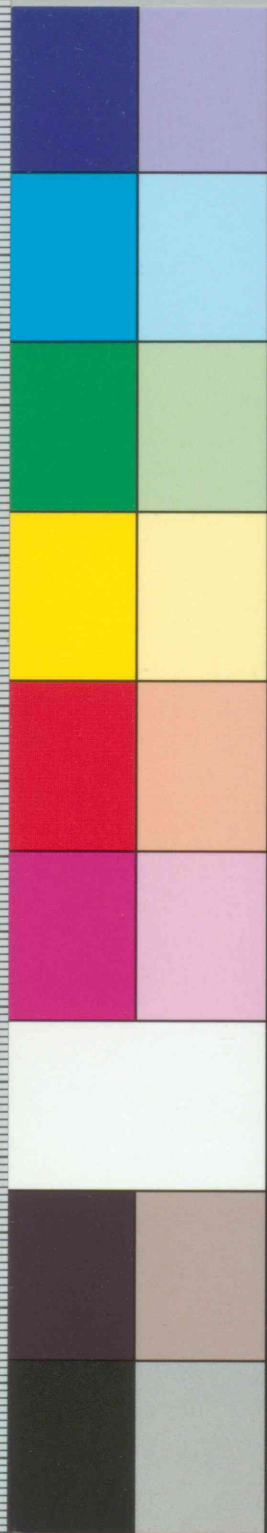
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



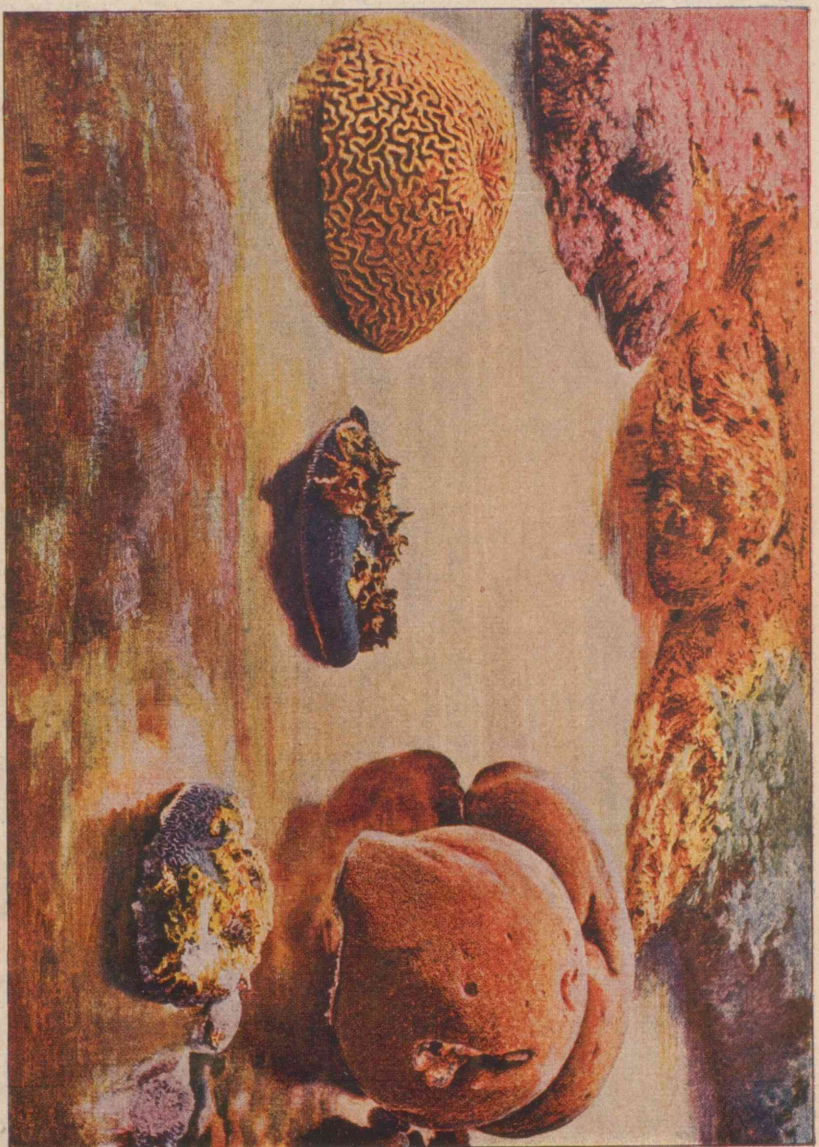
教科書文庫
4
810
42-1923
2000039915

女子新國文 卷四

女子新國文
 女子新國文
 女子新國文
 女子新國文
 女子新國文

教科書文庫
 4
 810
 42-1923
 2000039915

磯 珊瑚 珊瑚



資料室

375.9
 Ha 7

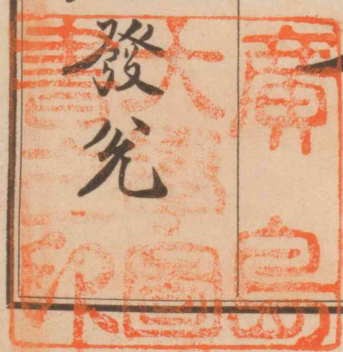
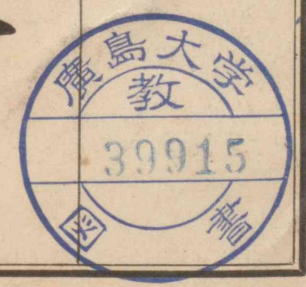
日四十二月二十年二十正大
 濟定檢省部文

文學博士 芳賀矢一編

女子新國文

東京

合資 會社 富山房 發兌



女子新國文卷四

目次

一	日本國民と自然美	一
二	秋夜の曲	六
三	配所の菅公	七
四	菅公の夫人	一〇
五	珊瑚礁	一八
六	猫の名(自修文)	二三
七	小禽	二四
八	植物と詩歌	三三

広島大学図書

2000039915



母と蘆

九 日光より	三六
一〇 明倫歌集より	四二
二 枯 林	四五
三 靈 泉	五一
三 文 鳥(自修文)	五四
四 晩秋初冬	六二
五 夕 雲	六五
六 鍵の國と障子の國	六六
一七 ベルリンだより	七三
一八 ベートーヴェン	七七
一九 月光の曲(自修文)	八二

二〇 冬枯の大井川	八六
二 心の洗濯	九二
三 國歌の話	九六
三 元 日	一〇五
四 朗 詠	一一一
五 七福神(自修文)	一二三
六 甲冑堂	一二五
七 郷里の祖母へ	一二九
八 努力と奮闘と嗜好	一三三
九 土器賣る翁	一三六
三〇 無線電信の發明	一三七
飛行機	

三 梁川星巖の妻	一三二
三 清淨潔白	一三九
三 家の紋	一四五
三 皇室に關する敬語	一四八
三 近江聖人の幼時	一五三
三 キャベル嬢	一六二
三 さすらひの皇后(自修文)	一六五
三 大海原	一六九

目次終



女子新國文 卷四

一 日本國民と自然美

上代に於ての衣食住は、多くは我が國土に繁茂して居る植物から材料を取つた。千木高知りといふ千木も、太敷立てといふ宮柱も、みな木材であつたことは言ふまでもなく、藤葛を以て括りつけてこれを綱根といつた。楮衣かうでのしろたへ、麻衣のあらたへ、これを染めるのは草木の汁で、すり衣であつた。正木、日蔭等の蔓草を取つて、かづらともし、手綱たすなともし

千木高知り
太敷立て

綱根

すり衣

草枕

た。梓、櫨、檀を以て弓を作り、柳、篠を以て矢をはいだ。葉盤、葉碗は木の葉を編んだものらしく、今の茅卷、柏餅にその名残を留めて居る。萬葉集の

家にあればけに盛る飯を草枕

たびにしあれば椎の葉に盛る

といふ歌で、上古時代の風俗も分る。到る處植物の繁茂した國土は、國民に向つて、衣食住の材料をすべてそれから取りしめたのである。

日本の娘の着物の模様のはでやかなのは、西洋人の著書にもいつも歎賞してあるが、日本の秋の野の景色を見れば、なほ更それよりも綺麗である。自然に衣服にもこれが染ま

友禪

緇珍

重ねの色合

をとし

つて來る。昔のしのぶの褶衣、今の振袖模様、裾模様、つまりは同じ事である。菊や、櫻や、梅や、牡丹を大きく染出した縮緬、友禪、緇珍の帯から、下駄の鼻緒の先まで、自然界の草木、花模様で飾られてある。その色合の名稱でも、櫻色、桃色、山吹色、栗色、葡萄色など、植物界から取つた名が多い。昔の女裝束は櫻重ね、梅重ね、山吹重ねなど、重ねの色合は、常に四季折々の花に因んであつた。優しい女流の裝束は當然ともいへうが、武士の戦争にいでたつ甲冑裝束にも、小櫻緋、卯の花緋など、いかにも優美ではないか。總じて我が國の甲冑は、當時の平服のはでやかなのに似合つて、いかにも美しい華麗なものであつた。馬の鞍にも青貝おいて、花などを散らしてある。

日本人が、いかに植物界や一般自然界に興味を有するかを、食物の方面に見れば、春秋の彼岸の牡丹餅、お萩の名を第一として、菓子屋の目録を一見して、一層その多い事が分る。松風、紅梅焼、磯松、桃山などの一般名稱は言ふまでもなく、柏餅、撫子餅、櫻餅、菱餅、茅卷などの外、植物以外の自然に取つたものでも、鶯餅、洲濱、時雨、越の雪、落雁、鹽竈、八橋、さゞれ石等の類がある。名稱ばかりではない、形も花木に取るのが多い。干菓子は別して松の葉や、菊の花や、すべて花木の形にこしらへるのである。^(一)藤村の目録などを見れば、細かい名は夥しいものである。汁粉の名なども十二月に配當して、それ〴〵雅稱がある。酒にも櫻正宗がある。菊正宗がある。劔菱がある。山

(一) 東京市本郷區
の有名な菓子店
菓

匙

川の白酒がある。蓬萊の島臺は今も儀式の時に用ひられるが、魚類の料理もまた植物界とは縁が離れぬ。刺身や鮓の下には笹の葉を敷く。牡丹餅や赤飯などを贈るには、重箱に南天の葉を敷く。料理の膳碗は、金蒔繪で花木の形を裝飾とする。漆器、陶器一切の美術工藝品が、多く草木花鳥の繪であることは固より言ふまでもない。これは裝飾美術として、近世のヨーロッパの美術にも少からぬ影響を與へたものである。茶の湯の棗^{なつめ}などはもとより、俗に匙を蓮華といふのも優美である。

二 秋夜の曲

川路柳虹

おとなふ

いつか淋しくおとなふは、

庭の樹の間を過ぐる風、

雨かごばかりおごろけば、

落葉は金にみだれたる。

池の水ぎはのはこやなぎ、

今宵はひごりうなだれて、

訪ふ人もなきつれなさを、

片われ月にかこちけり。

かこつ

— 温室の花 —

三 配所の菅公

(一)源顯基。後一條天皇に仕ふ。永承二年(一七〇七年)歿。

配所

俯仰天地に愧ぢず

肝膽相照らす

眞澄の鏡

一介

(二)延喜三年(一五六三年)歿。

むかし顯基中納言といふ人は、罪なくて配所の月を見れば、
「といつた。月夜の玲瓏隈なき光は、俯仰天地に愧ぢること
のない心を以て眺めてこそ、肝膽相照らす友である。眺めら
れる月に一點の曇もなく、眺める我が心に一塵の汚もない
麗しさ。良心の眞澄の鏡は、即ち皎然たる月の光に外ならぬ。
心靜かに月を見て、靜かに月を楽しむ人は、世に一人の友
もなく一介の同情者なくとも、誠に天地の廣い人である。天
地に愧ぢない人である。

罪なくて配所の月を見た人は、菅原道真であつたらう。

清明明徹

老境

皎潔

海ならずたゞよふ水の底までも
きよき心は月ぞ照らさん

の一吟を味はつて見れば、公の心は清明明徹である。何の犯した罪もないのに、右大臣の高官から落されて、大勢の子供も散りくばらく、稍老境に入つた身を以て、筑紫のはてに棄てられた當時の公の境遇には、何人も深く同情しなればならぬ。公の行は餘りに月のやうに明白であつた。公の心は餘りに月のやうに皎潔であつた。公が秋月に問ふといふ詩には、爲問未曾告終始被掩浮雲向西流とある。公の左遷は公の光明を嫉んだ浮雲の所爲である事は、昔も今も知らぬ人はない。公が月に代つて答へる詩に、天迴玄鑒雲將霽唯

チン、ニハ、月、し、も、一、と、境、ノ、ヤ、リ、ニ

左遷

(一)延喜元年。



(詞繪起縁野北) 公 菅 の 所 配

是西行不左遷と自ら慰めて居るのや、秋夜の詩に「月光似鏡無明罪」とあるのを見ては、公の心は光風霽月、何等一點の疚しいところのないのが分る。九月十日の夜、月影清く、蟲の音涼しい配所の秋には、前年の御遊をおもひ出して、

去年、今夜侍、清涼。
秋思、詩篇獨斷腸。
恩賜、御衣今在此。

口吟

捧持^グ毎日拜^チ餘^ス香^ヲ。

心づくしの
月影

と口吟せられた。かつては九重の雲居の上に見た月を、今は配所の月とながめられた公の心事は察するに餘りあるが、公のやうな偽のない心を以てこそ、月に對しての問答も出来るのである。公が配所の慰藉は、梅よりも、菊よりも、家郷の書信よりも、恐らくは心づくしの月影であつたらうと思ふ。

なか／＼に心づくしの浮雲も

ひかりを添ふる有明の月

本居春庭^(一)

(一)本居宣長の
子。文政十一
年(二四八八
年)歿。年六十
六。

(二)官幣中社。京
都市上京區馬
喰町に在り。

四 菅公の夫人

山田新一郎

菅公の夫人は京都の北野天滿宮の西の御座に祭られて

菩提寺
寄寓す

(一)第六十代。

有數の

内助

ある。夫人は菅公に別れて數年の後には、棲むべき家もなく、なり、吉祥院といふ菅家の菩提寺の一室に寄寓して居られたので、普通吉祥女と稱へられてゐる。昌泰二年夫人が五十歳に達した時、醍醐天皇がわざ／＼祝賀の勅使をお遣はしになつて、從五位下をお授けになつたといふ外には、夫人の傳記は多く傳はらないが、當時有數の賢夫人であつた事は考へられる。菅公の御子方はなか／＼大勢であつたが、上方の御子方は四人までも菅公と同時に諸國に流されたほど、揃うて相當の位置に出身されたところから見れば、その訓育の功は、公一人だけには歸せられまい。夫人の内助も與つて力のあつたことと思はれる。

延喜元年一月二十五日、菅公が俄に太宰權帥に左遷されて、二月一日都を立つて行かれる時、

東風ふかばにほひおこせよ梅の花

あるじなしとて春なわすれそ

と詠まれたのは、草木に寄せて最愛な夫人に別を惜しまれたものともいはれよう。西遷の道すがら、都への使にことづけて、

君が住む宿の木ずるをゆくくも

かくるゝまでにかへり見しはや

と盡きぬ名残を惜しまれたのも、即ちこの夫人に對してであつた。以てその琴瑟の情もしのばれるのである。

琴瑟の情

掃撤

食祿

夫人が京都の留守邸に於ける獨居の様子は、菅公の作られた太宰府の詩で多少窺はれる。公が太宰府で衣食住共に缺乏し、悲慘極る二箇年の月日を送られたに比べて、京都の方も亦劣らぬ境遇であつた事が想像される。菅公の太宰府で詠まれた詩の中に「雪夜家竹を思ふ」と題して、家僕は早く逃散しぬ。寒を凌ぎて誰か掃撤せん」といふ句があつて、留守宅では下男も逃げた様子だが、雪押竹の雪を拂ひ除ける者もあるまいと、故郷のことを氣遣つて居られる。この詩は延喜元年即ち「去年今夜」の詩を詠まれた年の冬の作である。一朝にして右大臣を罷められ、食祿に離れ、しかも大臣暮しで育つた御子たちは大勢ある。留守居の夫人の苦勞が一通り

はしたない

躍如イクリヤ

便風

や二通りでなかつたことは、申すまでもあるまい。こんな困難な家、しかも御咎を蒙つた菅家のことであれば、はしたない下男どもも早々に逃出して、權門に走つたものと思はれる。夫人はかゝる困難を凌いで、御子方相手に留守を守つて公の歸洛の日を待ち、氣丈夫に家政を齊へ、夫を大事に思つて居られたことは、更に次に引く菅公の太宰府に於ける詩に躍如として表れて居る。これも延喜元年冬の作と思はれるが、家書を讀む。と題して曰く、

「消息寂寥たり三月餘。便風吹着く一封の書。」

三月餘も都の便が絶えて、甚だ寂しく感じたが、けふはいかなる吉日ぞ、東の風が吾が家の手紙を吹きつけて來た、うれ

しいことである。

「西門の樹は人に移し去られ。」

これから以下の四句は、夫人の送られた手紙の内容を詠まれたものである。右大臣家の表門内であれば、松か梅か立派な樹が植ゑてあつたであらうが、今はそれを人が持つて行つた。多分米鹽の代に賣つたか、取られたかしたのであらう。

「北地の園は客を寄居せしむ。」

天神御所の北地といへば紅梅殿であらう。客を寄居せしむとあるから、こちらの方は借家か下宿に出されたものと見える。庭木の賣食に下宿業。これがきのふまで右大臣として帝の寵遇斜ならなかつた菅公の夫人の生計の有様である。

(一)公の屋敷址を
後世天神御所
といふ

寵遇
生計

太宰府の菅公はどんな心持でこの手紙を読まれたであらうか。

「紙に生薑を裹んで藥種と稱し。」

昔の草根木皮の藥には、生薑の配煎が必要とされたのであるから、いはば生薑は家庭衛生の必要品である。たまた、生薑が手に入りましたから、不時の用にと紙に包んで貯藏して置きました。困難の中でも一物もいやしくもせられぬ夫人の用意のほどが知られる。

「竹に昆布を籠めて齋儲と記す。」

内の御祭の御供物も十分には辨じかねる境遇である。珍しく昆布をもらつたからとて、御子方の總菜にもされずに、直

草根木皮
配煎

いやしくも
せず

總菜

神饌

千言萬句

反面
凜乎

百難を排す

藥餌
齊家

懊惱

ちに竹筒に入れて、御祭の時の神饌の用にしまはれたといふのである。

以上の四句は、千言萬句よりも明らかに、京地に殘された菅公一家の生活状態を菅公の筆で表して居る。何たる悲惨な境遇であらうか。その反面には、夫人が凜乎たる決心を以て、百難を排して生計の方法を講じ、缺乏の中に祭事を大事にし、藥餌のはてまでも注意して居られる、誠に行届いた齊家の有様が、あり／＼と見えるではないか。

「妻子飢寒の苦みを言はず。」

これ還つて余を懊惱せしむるを愁ふるが爲なり。」留守宅の現状は前の如くであるが、それをたゞその通りの

愚痴

指を屈す

事實として報じただけで、その餘は、徒に夫を心配させまいとてか、自分や子供の飢寒にせめられて困つてゐる愚痴は一言もいうては來ぬ。言はないどころか、御留守はとにかくどうか遣つて居ますと、却つて安心を求めて來る雄々しさは、なか／＼並々の婦人で出來ることではない。榮華これ事とした當時の婦人社會では、指を屈すべき第一人であつたであらう。實に菅公の夫人たるに耻ぢない人といへようと思ふ。

五 珊瑚礁

山崎直方

南洋の自然界に於て最も興味あるものとしては、何より

も指を珊瑚礁に屈せねばなるまい。珊瑚礁は熱帶海洋、殊に太平洋の特色であつて、我が占領諸島の如き、その陸島たると火山島たるとを問はず、その種類に富み、殊に大部分は島そのものが全體珊瑚礁から出來てゐて、洋中に孤立してゐる。珊瑚礁の存在は、すでに我が領土中小笠原島、琉球諸島、臺灣等の沿岸地方に認め得られるが、その規模、その光景、固より南洋諸島のそれと比べることは出來ぬ。由來珊瑚は極めて清澄な海水を好むもので、南洋の海水の透徹せることは、碇泊した艦船が水中を透して、船底の龍骨まであり／＼と見ることが出來るほどである。波靜かな礁湖の稍淺い所で、視眼鏡を用ひて、清く温い海底を窺ふ時、珊瑚の林は實に筆

蟠屈す

槎枒

紙に盡し難い美觀を呈してゐるのに驚かされる。

珊瑚の中には樹枝状のものが多し。その蟠屈した根株を張り、槎枒たる枝を交へた有様は、實に千姿萬態であつて、多くは白色の中に、或は鮮な淡紅色、或は美しい董青色を交へてゐる。珊瑚の枝々の間には、各種の藻類、殊に堅い石灰質の葉をもつた石灰藻も少くない。これ等が互に茂り合ふ有様は、實に秋の野に八千草の咲亂れた趣がある。そしてその珊瑚の林の中には、大きな沙噀（一）が數知れず横たはつてゐるかと思へば、又青綠紅紫、熱帶の色彩眩いばかりな大小の魚族が、その間を縫つて泳いでゐる。パラウやマーシャルなどに、は、長さ三尺にも達する巨大な碑礫貝（二）が横たはつてゐる。濱

(一) Palau. パラウ諸島。太平洋中にあり、フィリピン諸島の東方。
(二) Marshall. マーシャル諸島。太平洋中にあり。

(一) Angaur. 大洋洲西北部パラウ群島中の島。

の眞砂の飽くまで白いのは、いづれも珊瑚の碎けて出來たものであるが、その中には、又海水中に浮游する微細動物の抜殻も少からず混つてゐる。燐礦の産を以て名高いアンガウル島の海岸に打上げられてゐる砂の如き、殆ど全部が罌粟粒大の有孔蟲の抜殻であつたのには、實に驚奇の感に打たれた。

珊瑚島は常に蒼々たる椰子の森を戴いてゐる。初に栽培したものもあるが、多くは自然生である。元來椰子の實は厚い纖維質の果皮を被つてゐるから、よく海流に泛んで、遠く漂流することが出来る。偶、岩に當つても、容易に毀損するところがない。それが流れ流れた末、珊瑚島に打上げられると、始

自然の配劑

めて根を下して生長する。自然の配劑は、誠に此の如く巧である。珊瑚島は極めて低い島であるから、椰子の森の方が島そのものの海拔よりも高いものが多い。されば珊瑚島の島影が海客の眼に入るのは、餘程近距離へ來てのことで、十哩も離れると、最早その影を見失ふことがある。有名な世界的航海者マジェランが始めて太平洋を横斷した時、南太平洋のパウモツ諸島の一珊瑚島からマリヤナ諸島に來るまで、幾千哩の八重の潮路に、途中幾百とない珊瑚島の隻影をだに認めずに過ぎたのも、その爲である。沖合から珊瑚島に近づく時始めて眼に入るのは、水平線上一抹の蒼い線である。更に近づくと、その蒼い一文字の下に白い線を見る。言ふま

(1) Magellan. ホルトガル人。航海者。西暦一四八〇年—一五二一年。
(2) Mariana. 小笠原島の東南太平洋中の諸島。
八重の潮路

點綴す

でもない、蒼い線は椰子の森で、白い線は水際に打上げられた珊瑚の砂礫と、そこに寄せては返し、返しては寄せる磯波である。この細く平たい珊瑚島が、或は長く或は短く水平線上に點綴された状は、恰も品川沖の臺場を遠望するやうである。或人は言つた。

——我が南洋——

自修文

六 猫の名

平 雅 翰

不肖 おろか。もと親に似ず。おろから來た語。
見識 もの事をわきまへる力。ひんかへ。
なま好事 なまものすき。
さながら あたかも。ちやうど。
至らぬ沙汰 不十分な話。

人は賢不肖ともに自己の見識は有りたきものなり。昔さるなま好事のものあり。或時鼠を防がんため猫を飼ひぬ。毛色黄ばみ、形大にして猛々しく、さながら虎に似たれば、こらと名づけて寵愛せり。友人來りてその故を問ふ。答ふるにその意を以てす。その人いへるやう、それはまた至らぬ沙汰なり。虎より強き

まされるな
らめ
まさつてゐる
であらう。
よからんめ
れ
う。いであら

ものあり。世に龍虎といへば、龍こそまされるならめ。」といふ。さらばその意に随はんとて、龍と名づけぬ。さる人來りて、それも至らぬなり。龍をのせて空を走るは雲なり。」といへば、又、雲を吹きちらすは風なり。風こそよからんめれ。」といひつる人のあるまゝに、風と名づけ置きたりしに、又人ありて、何ほど烈しくとも、吹破ることのかなはぬは壁ならん。」といへるほどに、いよゝゝ惑ひて、いかが名づけてよからんとあたりの人に問ひければ、壁も呼びにくからん。壁に穴を穿つものは鼠なり。それを捕ふるものは猫ならん。」といはれ、始めて心づきしといふ。これおのれに見識なきゆゑ、ここに問ひ、かしこにたづねて、いよゝゝ惑へるなり。あまり好事もいらぬものなり。

七 小 禽

薄 田 泣 堇

吹きさらし

私たちが七つ八つの頃には、そろ／＼秋が更けて來ると、晴れきつた空を毎日のやうに雁が渡つた。私たちはそれを見かけると、吹きさらしの野路に立つて、空の一方を振仰ぎながら、

雁よ棹さそになれ。

棹さそになつたら鉤かぎになれ。

と、その長い行列が漸次に雲の中にじみこんでしまふまで、聲を涸して叫んだものだ。が、いつの間にか雁も少なくなつて、今では晝間その長い列が空を渡ることとは、よく／＼人氣遠い野原かどこかでないと、めつたに見られなくなつた。その頃はまた後の岡に行つて見ると、葉の落ちかゝつた

矮小



雑木林に、小鳥が澤山来て居たものだ。小鳥といふと、私は海などを越えて来る彼の小さな旅人の、あわたしい旅を考へて、いつも言はうやうのない淋しい旅心地を覺える。

まづ鶉うずが来る。秋の彼岸が過ぎて、そろ／＼日影が黄色がかつて来ようといふ頃、私たちはどうかすると暖い日の午過、そこの木立で甲高い鋭いその聲を聞くことがある。あゝもう秋だな。と思はず振反つて見ると、矮小

な櫟くわきにまじつて、ずばぬけて背の高い榆にれの木に鶉が一羽止つて、黄色い夕陽を受けて、羽が金のやうにきら／＼して居るのが見える。私たちはその瞬間、言はひうやうのない強い健かな氣持が胸に流れるのを覺える。

次には鶉うずが来る。

山家の午過、懶さうな蟋蟀せりふすの聲もいつの間にか止んで、枯葉一つ寝返を打つ音までがはつきりと耳に入る静けさの底に、どこやら窺れた



人の溜息とでもいつたやうな微な聲が洩れて来て、何の音とも分らない。すると、樹蔭の韭^ぢ畠かどこかで、餘念もなくせつせと仕事に精出して居た農夫が、ひよいと顔を擧げる拍子に、すぐ鼻先の小枝から、枯葉のやうに小鳥がついと身をそらして、逃げていつてしまふ。それが鶉だ。

鶉といつたら、まるで悲哀を抱いて居る人のやうに、大抵は連にはなれて、たゞ一人で出て来る。そしてそこの小枝に止るなり、何か眼に見えぬ昔馴染でも招くやうに、ひよくりひよくりと軽い御辭儀をして、さゝやくやうな聲で唄ひ出す。私はそれを見ると、他の爲、世の中の爲といつたやうなわけでなく、自分一人の爲に唄つて、それで満足して居る人

たちを思ひ出さずには居られない。

鶉が來てももの十日と経たぬ間に、四十雀^{しよづ}が来る。この鳥は鶉と違つて、十羽も二十羽も群を組んで来る。山から里へ移る折などには、まるで時雨でもするやうに、細かい羽音がさつと空を掠めて聞える。そしてそこの木立におりるなり、眩しいほどす捷く、鰍^{なまこ}や雀の鵲^{たぐ}などを啄き廻しながら、鼠色の背をそらし、柔みのある圓い胸を見せて、透徹つた銀の鈴を振るやうな聲で、早口にしゃべり續ける。で、かうした大層な群の中には、さつとまだ羽の伸びきらない灰色の産毛そのまゝの雛兒が交つて居て、どうかすると高い枝に止り損ねて、もんどり打つて宙に返る事もあるが、そこはまた

もんどり打つ

ませた身振

きこく

馴れたもので、いきなりひよいと下枝につかまつて、ませた身振で、樹肌のひびを啄いたりする。まるで山家育のすばしこい、きさくな魂そのものを見るやうな氣持がする。

小雪がちらつく頃になると、鷓鴣が来る。これは鷓鴣と同じやうに、大抵獨法師で、それもこつそりと附近を忍ぶやうにして来る。冬の初の午過、山近い田舎の小家で、爺は火燵に潜りこんで、こくり／＼と居眠をする。その側で婆さんはせつせと絲車を繰つて居る。煤けた障子に檐に吊した干菜の影が見すばらしく映つて、時をりちつぽけな小鳥の影がちらついたりする。どうかして、絲目が切れて睡さうな鍾の音がぱつたり止むと、こそ／＼と掛菜をむしる音がするが、老人

鍾



い や さ そ み

の耳にそんな音の聴取れよう筈がない。婆さんは俯いたまゝまた絲を紡ぎにかゝる。さうかうする間に、鳥は舌打をするやうな聲を立てながら、ひよいひよいと小刻みに籬を傳はつ

て、隣から隣へと、狭苦しい物蔭を出たり入つたりして移つて行くのだ。それが鷓鴣である。

鷓鴣と後先になつて頬白が来る。冷たい雨のびしよびしよと降る中を、獨者の頬白が灰色の胸までぐしよ濡れにな

つて、しよんぼりとそこらの木に止つて居るのを見ると、私の國でこの鳥の啼聲を解いて、

一筆啓上つかまつる。

子供泣かすな、火の用心。

今度は便に金十両、

やりたいけれど、一文も御座なく候。

と言傳へるのを思ひ出して、しみじみと世渡のむづかしさと、旅心の寂しさを思はずには居られない。

後の雑木林にこんな小鳥が来る頃になると、野にはもうそろ／＼鶉うづらが來、鶉うづらが來る。

ハ 植物と詩歌

三 好學

譬喩的

(1) Jena.
ライプツヒの
西南五六哩
あり有名なる大學

植物の美を詩歌、俳句、文章等で表すことは昔から行はれて居る。これは歐米各國の文學にも見るところであつて、殊に詩聖ゲーテの作などにも多く出て居る。これ等の場合では、植物の形や色の美しいところを、そのまゝ記載的に表すのではなく、理想を加へて人間の性情などを譬喩的に示すものが多い。ゲーテの公孫樹の詩などはその一例である。

公孫樹は日本から外國へ渡つたもので、その時代は西暦一千七百五十四年、即ち今からは百七十年前である。ゲーテはドイツのエナ(1)の植物園に自ら公孫樹を植ゑたので、それが今は可なり大きくなつて居る。余が嘗て同地に行つた時、

同植物園長は親しくこれを見せてくれた。ゲーテは公孫樹の葉が眞中から少し裂けて居るのを詩的に觀察して、二つの心が一つになつて親和した場合に譬へたのである。公孫樹は日本の植物であるから著しいが、その外にも色々の草木、蘚苔などを詩化したのが澤山ある。すべて外國で最も賞觀する花は薔薇で、ちやうど日本で櫻を愛するやうであるから、随つてその變種變形が夥しく出來て居る。或學者の計算によれば、薔薇の品種は大約六千種もあらう。これはつまり培養の結果から起つたのである。薔薇が歐洲へ傳來した歴史、並びにこの花が文學、宗教、美術、工藝その他様々の人事に應用されたことは、ドイツの或植物學

者の「薔薇」と題する書物に委しく述べてある。

薔薇はかやうに何人にも賞愛され、愛の象徴として、古い時代から詩に歌はれて居る。又薔薇以外の植物では、椰子の葉は勝利の意を表すことになり、又オリーブの葉は平和を意味し、月桂樹の葉は名譽を表してある。これ等は皆いづれも古い頃からの考であるが、又中にはもつと新しく意味をつけたのがある。例へば、含羞草は感觸の意を表し、蘆は氣の迷ふ有様を意味して居る。又我が國では松竹梅の三つはめでたいことに用ひられ、牡丹は富貴の相、蘭は節操の高いこと、菊は隱逸の情を表すなど色々ある。尤もこの中には、支那から傳はつて來た考もある。

[Olive.

隱逸

花の色に因つても様々の意味をつけて居る。例へば、外國では白色は無失の意味に用ひ、赤色は愛の意、緑色は希望、黄色は熱心、青色は眞實、黒色は悲みを表して居る。又我が國では白色は清淨潔白を意味し、赤色は眞心を表し、黒色は悪心を表し、青色は未熟を示す等の違がある。これ等の色も亦花や葉にあてて、それ／＼詩歌の材料になる。

外國の詩又は畫では、薔薇を題材としたものが多いやうであるが、我が國では櫻の歌が最も多い。昔から花といへば櫻に限つて居るぐらゐで、櫻の歌は實に數が知れぬ。皆その花の美しいこと、趣の高いことなどを面白くいうてある。櫻の外には梅、蓮などがある。又松、竹、牽牛花、藤、芒、躑躅、萩、柳など

いづれも歌の好材料となつて居る。

植物生態美觀

母と蘆

西條八十

ふるさこの
母をおもへば、
片岡の
蘆もなつかし。

さや／＼こ
風のわたれば、
なびきよる
ゆふべの穂なみ、
わが母の
眉をしのばせ、

しめやかに
雨ふる夜半は、
そここなき
葉ずれのひびき、
おん母の
聲音にまがふ。
ふるさこの
母をおもへば、
かの青き
蘆もなつかし。 — 靜かなる眉 —

片岡
にあつた所
なびきよる
云々
夕風になびき
よるあしの穂
先を見れば
母の眉をおも
ひだす
葉ずれ云々
しつとりと降
る夜半の雨に
ひびく葉ずれ
の音は、母の
は聲をしのば
せ

九 日光より

徳富蘆花

瞥見す
（一）栃木縣上都賀郡の町。二荒山の麓。
山舒水緩

去二十六日午前十一時、上野發の列車にて小春の田舎三十里を瞥見しつゝ、點燈頃日光（一）に着き、翌日中禪寺に向ひ候。その間三里、半途の清瀧までは、いはゆる山舒水緩の境にて、他の奇なく候。清瀧より足尾街道と岐れて右折し、始めて山間に分入り、馬返の山村を過ぐれば、道は高峰の間に入りて、頭上の青天、巾よりも狭く、大谷川雷の如く脚底に吼え候。これより中禪寺湖に到るまでの一里は、錦繡の山に候。かへで、漆、山柿、栗、樺、櫻等燃えに燃えて、黃焰紅火、眼もあやに候。松、檜、樅などの緑の、ちらほら入交りたるも、一入の眺に候。巖



（む望を山體男） 湖 寺 禪 中

魚籃

白煙縷々

金髮碧瞳

より巖に渡す獨木橋を、岩魚釣る男が魚籃提げて行くも、そのまゝ、晝に候。道は山色水聲の間を通じて、一步々々仰ぎ上り候。ふと頭を上ぐれば、夕陽火の如く左岸の諸峰を炙つて、半峰以上は赫として燃えんとするに、右岸の諸峰は落暉に背いて薄紫に闇み、ありとも見えぬ山腹の炭焼小屋より、一條の白煙縷々として立昇るなど、興味饒く候。

華嚴の下流と方等の下流と落合ふ邊にて、金髮碧瞳の西洋婦人が籐椅子に乗りて來るに逢ひ候。その後より、夫なる



俚歌

べし、立派なる西洋紳士が太き栗毛の馬に乗りて來り候、更に上るほどに、一曲の俚歌頭上に起りて、坂を曲れば、歌の主なる十二三の小娘が、炭負へる馬追ひ來るに逢ひ候。赤襟襦



華嚴瀧

袂に白手拭を被り、草鞋、股引、手甲の姿かひくしく、馬背に一枝の紅葉を挿したるなど、畫にも歌にもしたき風流に候。方等の瀧見茶屋を過ぎては何人にも逢はず、淋しきこと

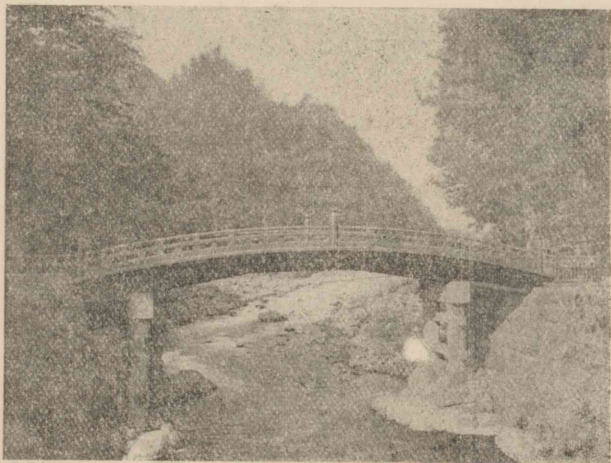
に候。木の間越しに光りし夕日の山は薄れ行きて、夕霧谷間

よりはひ上り、日暮れかゝり候。何處ともなく響く瀧の音、我が日踏む落葉の音の外には何もな光く、秋山の黄昏身にしみて覺え候。詩など吟じつゝ行く中に、羊神腸の坂盡き、疎林開けて、一面の橋明鏡白く夕闇に光り候。中禪寺湖にて候ひき。

當夜は湖畔の宿に水聲を聞

きて眠り、その翌日、山を下りて日光祠に賽し候。何やら満腹

賽す



の後に甘煮をふるまはれたる心地にて、勿々に看過致候。不具。
——青蘆集——

一〇 明倫歌集より

後醍醐天皇

世をさまり民安かれと祈るこそ

わが身につきぬ思なりけれ

源 實 朝

山はさけ海はあせなん世なりとも

きみにふた心われあらめやも

山 上 憶 良

(一)鎌倉三代將軍。二子。賴朝の元。年。一。八。承久。七。元。殺。二。十。八。あす。年。人。二。天。平。五。年。一。三。七。四。年。死。年。七。三。

(一)歌人。承平三年。五十三。年。死。年。七。十。

(二)古野朝の忠臣。肥後。元弘三年。二。九。九。三。年。死。年。四。十。

(三)東山天皇に仕へて左大臣。攝政となる。

白がねもこがねも玉も何せんに

まされる寶子にしかめやも

藤 原 兼 輔

ひこの親の心は闇にあらねども

子を思ふ道に迷ひぬるかな

菊 池 武 時

ふるさどに今宵ばかりの命とも

知らでや人の我をまつらん

九 條 道 房

咲く花の梢を見ても思ひ出づる

つらなる枝の枯れし名残を

(一) 歌人。承平三年(一一五九)歿。年五十三。

(二) 歌人。正暦元年(一一六一)歿。年六十。

(三) 國學者。文化八年(一一八二)歿。年六十六。

松平定信
埋火のあたりのごかにはらからの

まごゐせし世ぞこひしかりける
藤原兼輔

あたらしき年の始のうれしきは
ふるき人ごちあへるなりけり
平兼盛

世の中にうれしきものは思ふごち
はな見てくらす心なりけり
村田春海

天地の神やかためし萬代に

たてて動かぬ國のみはしら

一一 枯 林 吉江喬松

葉守の神

寂しいものの極みのやうにいはれて居る冬枯の林の中、
或夕方自分はその中へさまよひ入つた。一度は葉守の神の
宮居とも思はれ、百鳥の啼交す紅葉の樂園とも榮えて居た
林の、今はもう葉といふ葉が悉く落盡して、いかなる小枝の
端の端までも、その跡をとめて見る事が出来、樺の樹、榛の樹、
榎、栗などの幹もあらはに骨のやうに成つて、いかにも寒げ
に立つて居る。

林の中は寂然として、落葉を踏んで行く自分の足音の、次

横雲

第にこめて来る四邊の夕靄の中に消えて行くばかり、外には何の響もない。自分とはある榛の樹の幹に倚つて、凝然と枝の端から上の方を見上げた。空にはまだほんのりと明るく雲の浮いて居るのも見える。よく春の夕方などに、輪をなして樹間に飛んで居る小さな羽蟲の群も見えず、秋の暮方晩く啼きながらねぐらに歸つて行く山鳴の聲も聞えない。たゞ樹間を透して日没後の餘光が微に横雲の灰色したのを下から照らして、低い山の巔と雲の間に細長い深紅色を留めて居るのが見えるばかり。その雲間を遠く眺めたり、その紅の次第に黒く成つて行くのを見つめて居ると、我知らず涙が眼瞼に溢れて来る。この時の寂しい懐かしい思は何

に譬へようか。

この頃はもう嵐も度々は起らない。野を吹き森を拂ひ、山を越えて爲すべき任務をば爲しはてたのか、たゞ雪を含んだ雲をば、野末に遠く地平線の上を彼方此方に追ひやつて居るばかり、随つて夕嵐の林を襲つて来ることもなく、闇の色の林の奥から次第に濃くなつて来るにつれ、寂莫が四邊を領して来る。

ふと氣がついて見ると、樺の樹の高い小枝に一片の葉がついて居る。風のありとも思はれないのに、ひらくと廻つて居る。周囲が寂として音もなく動かないのに、この葉のみが微に聲立てて躍つて居るさまがいかに不思議で、何か

五體の緊縮

目に見えない者がその葉の蔭に来て、それをば吹鳴らして居るのではあるまいかと思ふと、不意に怖い物の力が身に迫るやうな氣がして、五體の緊縮するのを覺えるが、やがてその葉の搖ぎも靜まつて、枯林の中は眞暗となつてしまふ。自分はなほ動かうともせず、闇の中に立ち盡して居た。

霜をれ

或朝のことて、普通には霜をれのしたといはれて居るうら寒い曇つた日に、江戸川堤の上をさまよつた。霜白く刈田の上に置き、堤の枯草の葉に結んで、掃集められるぐらゐにも見えて居るが、いつも霜の朝には見る華やかな麗しい日光の、けさは隠れて灰色の雲が濃く、雀の啼聲も折々どこからかじい／＼と寒げに聞えて來るばかり、寒さは肌にしみる

傾聽す

て、すべての景色が何となく頭の垂れるのを覺えしめる。ふとこの時頭上でから／＼と鳴る音を聞いた。見上げると、堤の上に立並ぶさいかちの樹の梢に、莢と莢が相觸れて音を立てるのであつた。またから／＼と鳴る。その寂しい響、思はず立止つて傾聽せずには居られない。下にはありとも思はれない風の、梢高く來て觸れるのか、それとも莢の中なるさいかちの實のおのづと搖いで發する響であるか。自然の物音の中で、これほど寂しい思をさせる物はない。靜かな日に林の中でおのづと落ちる松かさの響や、夜更けて後庭つゞきの柴山に、ぽつ／＼と落ちる栗の實の音、いづれも靜寂の感に堪へざらしめるが、霜枯のした川添堤、さいかちの實の

から／＼と鳴るのを聞くほど寂しいものはない。じつと眼を閉ぢて聽いて居ると、その響が胸にしみこみ、身はさながら靜寂の中へ消えさつてしまふかのやうに思つて居ると、舊時の事や、故郷の事などが胸に浮んで來る。

折ふし墓場などへ行つて見ると、四邊の靜寂な中で、墓標の櫛の葉のみが獨りさら／＼と音を立てて居ることがある。周圍が寂しいだけ、それだけその物音は不思議な感を起させる。さいかちの實の鳴るのも同様で、寂しさの中心は、その物音に繋がれて居るやう。聽く者の身も心もその物音に引きこまれ、われ孤獨といふやうな感が、ひし／＼と胸に迫つて來る。

一二 靈 泉

石川雅望

日ぐらし

美濃國に老いたる夫婦ありけり。ともに七十に餘れり。日毎に山に登りて、薪をとりてなりはひとしけり。一日翁山に行きて、日ぐらし歸り來ねば、姥心もとながりて、門に立ちて待ちつけ居たるに、戌すぐる頃、薪荷なひて歸り來ぬ。いかに遅かりつる。と燈火とりて迎へ見るに、思ひかけず、翁顔だち二十許の若人になりて、髪もつややかに、昔のごとなりになり。さてもいかなる事ありてかゝりし。と問へば、翁いへらく、「はじめ山に入りて薪こりてある時、見なれぬ鳥を見つけて追ひもて行くに、例の山とおぼえぬ所に出づ。そこに清げ

掬ぶ

に流るゝ泉あり、のんどかわきぬれば掬びて飲むに、よく醸したる酒にたがはず。心ゆくばかり飲みけるまゝ、頻りに酔をもよほして、やがてそこに倒れ伏しぬ。ねぐらもとむる鳥どもの來鳴くに驚き目さめて、いそぎ走り歸りぬ。」といふ。隣なる人も訪ひ來て、おほかた驚きあきれざるなし。あしたになりて姥、われも行きて彼の泉汲みて飲まし。」といふ。うべなり。とく行きぬ。」とて、よく道を教へて出し立ててやりぬ。かくてその日も暮れぬれど、姥歸り來ず、初夜も過ぎにたれど見え來ず。夜一夜いも寝られねば、鳥とともに起きて、行くへ索むとて急ぎ行く。心もとなきこと限りなし。されど知りたる道なれば、朝霧のまよひもたどらず、やうく彼處に到り

初夜
夜一夜
いも寝られ
す

ぬ。泉のあたりを見れど人もなし。狼などにや食はれけん。我が身こそ若がへりたれ、年頃の女をうしなひではいかにせましと、泣きさけびて倒れ伏しけるが、小さき巖の陰に物ありと見て、近づき見れば、生まれ出でて月ばかり経ぬると覺ゆる赤子の、さゝやかなる聲して泣き居たり。よく見れば、姥が着なれつる衣の中に包まれてあれば、かき抱きて、「姥か。」と問へば、泣きつゝうなづく。やがて懷に入れて宿りに歸り、乳をもらひて養ひ育てけるとぞ。あまりに泉を貪りて、いたく飲みすごしける過なりとぞ語り傳へたる。

—しみのすみか物語—

自修文

一三 文鳥

夏目漱石

(一) 鈴木三重吉。小説家。文學士。廣島の人。
伽藍のやうな。お寺のやうな。ここには、だいつびろく大きなこと。
夢に文鳥を云々
文鳥の事を思ひながら寝た心持。
大儀。たいそうであること。おく。
明るみ。明るいとこ。

三重吉は鳥籠を丁寧^(一)に箱の中に入れて、縁側へ持出して、「ここに置きますから。」といつて歸つた。自分は伽藍のやうな書齋の真中に床を展べて、冷やかに寝た。夢に文鳥を背負ひこんだ心持は、少し寒かつたが、眠つて見れば、不斷の夜の如く穩である。翌朝眼が覺めると、硝子戸に日がさしてゐる。忽ち文鳥に餌をやらなければならなかつたと思つた。けれども起きるのが大儀であつた。今に遣らう、今に遣らうと考へてゐるうちに、とうとう八時過になつた。仕方がないから顔を洗ふ序をもつて、冷たい縁を素足で踏みながら、箱の蓋を取つて、鳥籠を明るみへ出した。文鳥は眼をぱちつかせてゐる。もつと早く起きたかつたらうと思つたら、氣の毒になつた。

華奢。はわかし。く、しなやかであること。

文鳥の眼は眞黒である。瞼の周圍に細い淡紅色の絹絲を縫附けたやうな筋が入つてゐる。眼をぱちつかせる度に、絹絲が寄つて一本になると思ふと、又圓くなる。籠を箱から出すや否や、文鳥は白い首をちよつと傾けながら、この黒い眼を移して、始めて自分の顔を見た。さうして「ちよ」と鳴いた。

自分は靜かに鳥籠を箱の上に据ゑた。文鳥はぱつととまり木を離れた。さうして又とまり木に乗つた。とまり木は二本ある。黒味がかつた青軸を、程よい距離に橋を渡して、横に並べた。その一本を軽く踏まへた足を見ると、いかにも華奢に出來てゐる。細長い淡紅の端に眞珠を削つたやうな爪がついて、手頃なとまり木をうまく抱へこんでゐる。すると、ひらりと眼先が動いた。文鳥はすでにとまり木の上で方向を換へてゐた。頻りに首を左右に傾ける。傾けかけた首をふと持直して、心もち前へ伸したかと思つ

たら、白い羽が又ちらりと動いた。文鳥の足は向ふのとまり木の真中あたりに、具合よく落ちた。「ちゅ」と鳴く。さうして遠くから自分の顔をのぞきこんだ。

自分は顔を洗ひに風呂場へ行つた。歸りに臺所へ廻つて戸棚を明けて、昨夕三重吉の買つて来てくれた粟の袋を出して、餌壺の中へ餌を入れて、もう一つには水を一杯入れて、又書齋の縁側へ出た。

三重吉は用意周到な男で、昨夕丁寧に餌を遣る時の心得を説明して行つた。その説によると、むやみに籠の戸を明けると、文鳥が逃出してしまふ。だから右の手で籠の戸を明けながら、左の手をその下へあてがつて、外から出口を塞ぐやうにしなければ、左の手つしまでして見せたが、かう両方の手を使つて、餌壺をどうし

て籠の中へ入れる事が出来るのか、つい聞いて置かなかつた。

自分は已むを得ず餌壺を持つたまゝ、手の甲で籠の戸をそろりと上へ押上げた。同時に左の手で開いた口を塞いだ。鳥はちよつと振返つた。さうして「ちゅ」と鳴いた。自分は出口を塞いだ左の手の處置に窮した。人の隙を窺つて逃げるやうな鳥とも見えな

いので、何となく氣の毒になつた。三重吉は悪い事を教へた。

大きな手をそろ／＼籠の中へ入れた。すると文鳥は急に羽搏を始めた。細く削つた竹の目から、暖いむく毛が白く飛ぶほどに翼を鳴らした。自分は急に自分の大きな手が厭になつた。粟の壺と水の壺をとまり木の間に漸く置くや否や、手を引つこました。籠の戸はぱたりと自然に落ちた。文鳥はとまり木の上に戻つた。白い首を半ば横に向けて、籠の外にゐる自分を見上げた。それから曲げた首を真直にして、足の下にある粟と水を眺めた。自分は

食事をしに茶の間へ行つた。

その頃は日課として小説を書いて居る時分であつた。飯と飯の間は、大抵机に向つて筆を握つて居た。静かな時は自分で紙の上を走るペンの音を聞く事が出来た。伽藍のやうな書齋へは、誰もはいつて來ない習慣であつた。筆の音に淋しさといふ意味を感じた朝も、晝も、晩もあつた。しかし時々はこの筆の音がびたりと止む、又止めねばならぬ折もあつた。その時は指の股に筆を挟んだまゝ、手の平へ顎を載せて、硝子越しに吹荒れた庭を眺めるのが癖であつた。それが濟むと、載せた顎を一應つまんで見る。それでも筆と紙が一緒にならない時はつまんだ顎を二本の指で伸して見る。すると縁側で文鳥が忽ち「千代。千代。」と二聲鳴いた。

筆をおいて、そつと出て見ると、文鳥は自分の方を向いたまゝ、とまり木の上からのめりさうに白い胸を高く突出して、高く「千

代。」といった。三重吉が聞いたらさぞ喜ぶだらうと思ふほどな美しい聲で「千代。」といった。三重吉は、今に馴れると『千代。』と鳴きますよ。きつと鳴きますよ。」と受合つて歸つて行つた。

自分は又籠の傍へしやがんだ。文鳥は膨んだ首を二三度豎横に向け直した。やがて一團白い體が、ぼい」ととまり木の上を抜け出した。と思ふと、綺麗な足の爪が半分餌壺の縁から後へ出た。小指を掛けてもすぐ引つくり返りさうな餌壺は、釣鐘のやうに靜かである。さすが文鳥は軽いものだ。何だか淡雪の精のやうな氣がした。

文鳥はつと嘴を餌壺の眞中に落した。さうして二三度左右に振つた。綺麗にならして入れてあつた粟が、ばら／＼と籠の底にこぼれた。文鳥は嘴を上げた。咽喉の所で微かな音がする。又嘴を粟の眞中に落す。又微かな音がする。その音が面白い。靜かに聽いて居

ると丸くて細やかで、しかも非常に速である。莖ほどな小さい人が、黄金の槌で瑪瑙の基石をつづけざまに敲いて居るやうな氣がする。

嘴の色を見ると、紫を薄く混ぜた紅のやうである。その紅が次第に流れて、栗をつゝく口先の邊は白い。象牙を半透明にした白さである。この嘴が栗の中へはいる時は非常に早い。左右に振蕩く栗の珠も非常に輕さうだ。文鳥は身を逆さまにしないばかりに、尖つた嘴を黄色い粒の中に刺しこんでは、膨んだ首を惜氣もなく左右に振る。籠の底に飛散る栗の數は、幾粒だか分らない。それでも餌壺だけは寂然として靜かである。重いものである。餌壺の直径は一寸五分程だと思ふ。自分はそつと書齋へ歸つて、淋しくペンを紙の上に走らしてゐた。縁では文鳥が「ち」と鳴く。折々は「千代千代」とも鳴く。外では木枯が吹いてゐた。——漱石全集——

一四 晩秋初冬

徳富蘆花

霜降り、木枯吹初めてより、庭の紅葉、門の銀杏頻りに飛び、晝は書窓を掃ふ影鳥かと疑はれ、夜は軒を撲ちて晴夜に雨を想ふ。朝に起き見れば、滿庭皆落葉。眼をあぐれば、さても瘦せたり。楓の梢、錦は地に散敷きて、梢には昨夜の木枯に残されし二葉、三葉、四葉心細げに朝日に光り、きのふまで黄金の雲と見し銀杏も、けさは膚薄う骨露れ、晩春の黄蝶にも似たる殘葉の、なほ此處彼處にすがりつきたるもあはれなり。

二

時たま

この頃の晝こそいと静かなれ。朝は霜、夕は風のさすがに寒けれど、晝は空青々と高く澄みて、日光清く美し。窓に對して書讀み居れば、都に住むとしも思はれぬばかり静かなるに、時たま障子にうつる物の影、何ぞと障子開けば、庭の杏樹の葉は落ちて、槎枒たる枝の縦横に青空をはさみたるに、梧葉にや大きな枯葉の一つ落ちかゝり、なほ落ちもやらで、静かに日光に光りたるものをかし。

庭も寂びぬ。霜枯の菊俯きて影を落し、鳥の啄み残せる南天の實の八手の下に紅う照れるも、華やかならずしていと寂びたり。雀三羽庭に下りて餌をあさる。縁には老猫の日を浴びて眠りぬ。蠅一つ飛來りて、障子をはひ歩く音がさく

と聞ゆ。

三

(一)「芋あらふ女
西行ならば歌
燕よまん。」
暮雨蕭々

邸の内も寂びぬ。栗も、銀杏も、桑も、楓も、榎も皆落葉して、月夜にはその影限りもなく地に亂れ、踏分けかぬる心地す。落葉焚く煙、邸内の此處彼處に立上りて、茶の花ほのかに香る夕、はらくと時雨栗の落葉をたゞきて、ぼんやりと黄昏れ行く頃は、西行ならば歌詠まんとぞ思ふ。暮雨蕭々、今行過ぎし傘より音一入まさりて、世はこの雨の中にはつべく思はるゝ夜は、默然として吾に伴なふ吾が影もあはれなり。

四

月色のほのかなる夜に、ほの白き銀杏の落葉を踏みて庭

に立てば、月一しきり薄れて、はらくと木の間洩り来る二
點、三點。時雨かと思へばすでに止みて、又月になりゆく。この
趣誰にか語らん。

月なくて寒星空に満つる頃、木の下に寂然としてたゞず
めば、夜氣凝りて動かず、良久しうして大氣少しくふるひ、頭
上に枯梢の相ふるゝ音あり、足下に落葉のがさりといふ響
あり、一瞬にして止む。星の語れるにやあらずや。

月霜の如く地に冴え、木枯海の如く空に吼ゆる夜は、人籟
すべて絶えて、直ちに至上の聲を聞く心地す。

——自然と人生——

一五 夕 雲

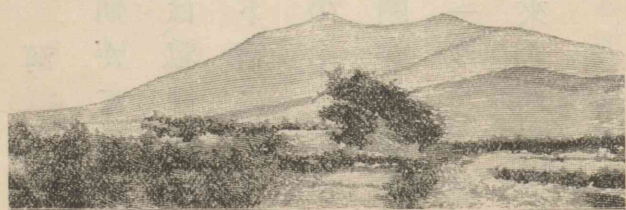
横 瀬 夜 雨

みぎはに葦の花ちりて、
霧こそこむれ下つ瀬に。

なびく尾花の末ごほく、
秀づる峰は筑波嶺か。

浪たゞ白きおほ利根に、
ゆき暮したる旅なれば、

我がなつかしむ山のみは
かくさずもあれ、夕雲よ。



山 波 筑

——現代詩人選集——

(一)利根川の
と。上野國に
根。文殊山に
發し、前橋市
を過ぎ、東京
灣に注ぐ。東
太。郎ともい
ふ。

精神的生活
物質的生活

(Brussels)
ベルギー國の
首府

一六 鍵の國と障子の國 河上 肇

西洋人の精神的乃至物質的生活を何かに纏めて、掌の上
に載せて見せよと註文をされたならば、私は鍵を出して示
さうと思ふ。始めてブリュッセルの素人下宿に入つた時、定め
られた自分の部屋を見廻して、私は鍵の多いのに驚いた。戸
を開けて室に入ると、その戸を内から閉ぢる爲に鍵がある。
北側に窓がある、その窓に亦鍵がある。一度これ等の鍵を下
したならば、誰も私の部屋にはいつて來られぬことになつ
て居る。

これ等の鍵を見て、道理からいへば、私は安心すべきであ

危惧

要領を得ぬ

らうが、實際は寧ろ淡い不安と淺い危惧に襲はれた。戸棚が
ある。勿論戸に錠があり、抽斗に鍵がある。洗面臺の下に四段
の抽斗がある。一々それに鍵がこしらへてある。机にも抽斗
がある。それにも亦鍵がこしらへてある。凡そ開閉の出来る
ものに、特別な装置のないものは全くないのである。郵便を
一つ入れに出る。歸る時には、必ず鍵を出して錠を外さぬと、
家の大戸は開かぬのである。夜になると、その大戸に内から
錠を下す。鍵がなくては外からはどうせ開かぬ戸であるが、
なほ用心のために更に錠を下すのだと見える。錠が下りた
後は、外から鍵を入れて、一回半廻さぬと戸は開かぬ。鍵の生
活に慣れぬ私は、この大戸の鍵の用法に就いて、容易に要領

を得ないので、暫くまごついた。同宿のT君は嘗て鍵を忘れて、遂に一夜をホテルで過された事があるといふ。

パリに来て始めて西洋の旅館に宿つた。私の部屋は戸を閉めると、鍵がなければ外からは開けられぬ。それにも拘らず、内から又錠を下す爲に、別の鍵が備へ付けてあつた。

たゞ今の宿はS君の向隣であつて、同君が讀書の燈は、窓から坐りながら見られるが、しかも同君の部屋を尋ねる爲には、錠の下りる戸を四度通らねばならぬ。白晝に尋ねても、一度は鈴を鳴らして、内から戸を開けてもらはねば、同君の部屋の戸を敲くわけには行かぬ。

私はブリュッセルとパリを見ただけであるから、俄に斷言

個人主義

は出来ぬが、恐らく西洋諸國に於ける鍵の數は、人口の幾倍かに當つて居るだらうと思ふ。聞くとところによれば、このパリ市の各停車場で下車乗車するもの、日々三十三萬人、地下鐵道に乗るもの、日に百七十萬人といふが、假にこれ等の人が五個づつの鍵をもつて居るとしても、このパリ市だけで、一日約一千萬の鍵が汽車に乘降りする筈である。その外電車に乗り、自動車に乗り、馬車に乗り、乃至は靴に乗つて歩いて居るものを數へ上げたならば、往來して居る鍵だけでも、恐らく半億に達するであらう。實に西洋は鍵の世界である。西洋は個人主義の國である。それゆゑ部屋を固めるのに厚い煉瓦の壁を以てし、出口に重い戸を設け、戸に丈夫な錠

蟄居

を下し、蟄居する時は敢へてこれを窺ふを得ざらしめて居る。

家族主義

この地に在つて遠く日本を顧れば、日本は實に家族主義の國である。さうして日本の家族主義が、西洋の個人主義と恐しい差異を有するが如くに、日本人の住居のさまは、恐しく西洋人のそれと相違して居る。鋸を下した重い戸の代りに、日本では紙一枚の障子で部屋を圍んで居る。出入自在である。共同主義である。たとひ一軒の家が五間になつて居ようと、十間になつて居ようと、實は一間の家である。五間、六間乃至數十間の室が離れる如く、即くが如くにしても、茫然漠然自ら一室を成してゐるのが、日本の家である。この「家」は實

に日本獨特のものである。夫婦はじめ家族一般相寄り、相信じて一體をなし、その間一點の秘密をも存せざるところが、日本の「家族」の精神である。

この精神を建築で表せば、即ち日本流の家屋になる。鋸を下した戸の代りに、紙で張つた障子になる。西洋にも日本流の家屋は造り得られる。しかし例へばこのパリの眞中に、さやうな家を造つて見ても、これに住み得るパリ人が居ない。西洋人は室をもつて居る。しかし西洋には家がない。家をもつて居るのは、世界の文明國中たゞ日本人だけである。

—祖國を顧みて—

(一)大正八年。
(二)Jerusalem.
アジャトルコ
のシリヤの
都。耶蘇教と
ともに名高き
處。
(三)Port Said.
地中海よりス
エズ運河に入
る入口の港。

(四)Hamelke.

一七 ベルリンだより 徳富蘆花

随分永らく御無沙汰を致しました。私どもは去る六月中旬^(二)エルサレムを立ち、その下旬にポートセッド^(三)で講和條約調印の報に接しました。それからイタリーに二月、パリに二週間、スミスに二週間、スミスからドイツにはいり、ベルリンに來て二週間になります。小さなホテルの裏二階に二週間の逗留は、案外氣樂で、恐らく今まで經て來たどこよりも、ホームライクの感があります。しかし明日はそのベルリンにも別れて、ベルギーを經てパリに歸り、それからそろ／＼イギリスに渡る筈です。

(一)Nazareth.
アジャトルコ
のシリヤの
都。
土着

懸念

耶蘇の郷里のナザレ^(一)及びその附近には、可なりドイツ人が土着して居ます。壯年の男たちは兵になつたり、捕虜になつたりして、老人や女子供ばかり淋しく暮して居ます。ふとした縁から、その一二家族と懇意になりました。皆ドイツの前途について懸念して居ます。私はこんな話を彼等にしました。

「私は東京の郊外に住んで居るが、あの邊では百姓がよく寒中になると、麥踏をやる。十月末に蒔いた大小麥が、綠芽を吐いて二寸にもなると、ひどい霜が來る。麥は根あがりになる。そこで百姓がくはへ煙管で煩冠り、後手を組んで、ひよいひよい麥を踏みつけて行く。踏めば踏むほど麥の株は勁く

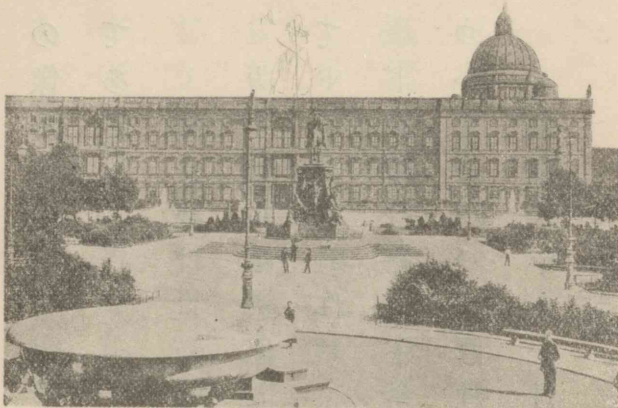
なり、太くなり、さうして來年の實入りが多くなる。踏まぬと
ひよろ／＼根あがりになつて、實入りが少い。自然はよくこ
の筆法を用ひる。五十年前にはドイツがフランスを踏んだ。
今度はそのフランスがイギリス、アメリカ、イタリー、日本ま
で引張つて來て、一所懸命骨折つてドイツを踏んだ。ドイツ
の前途は多望です。」と。

(Mark)
馬克
沈痛
(Kaiser)
麗々

私はそのドイツの眞中に來て、少しも前言を改める必要
を覺えません。ドイツの前途は正に多望である。その田舎を
通れば、野らには女が多く働き、その都會には片手、一本足の
乞食が多く、卵一個が二マ^(一)ークもして、見る程の人間は、皆ま
だ榮養不良な沈痛な顔をして居ます。カイゼルの寫眞を麗

富
貴
の
人

杞憂



ベ ル リ ン 宮 殿

麗と掲げて居る家もあれば、街頭革命の繪葉書を賣る者も
あり、富^{とみ}籤の廣告などが眼につき、こ
のちら／＼雪の寒空の下に、三百萬
の人の子がうよく／＼と芋の子を洗
ふやうにして居るのを見れば、ドイ
ツはどうなるかと懸念も出るが、そ
れは杞憂に過ぎぬのである。私は踏
まれた麥の前途を疑はない。却つて
踏んだ仲間の上が氣にかゝります。
先日この丸の内に往つて見た。
主のカイゼルはオランダに逃げて空宮になつて居る。この

皇居と直角に大きな寺院がある。その正面入口の上に耶蘇の像が右の手を舉げて立つて居る。像の右に左の言が刻してある。

「見よ、我は世の終まで常に爾曹と偕にあり。」

カイゼルは逃出しよう。しかしドイツの生命は決してドイツを離れぬ。

ドイツはその生命を一新し得る機會を與へられた事について、骨折つた百姓たちに眞實お禮を言はねばならぬ。

大正八年十一月一日の夕

ベルリンにて 徳富健次郎

—日本から日本へ—

(1) Corsica.
地中海中の一
領島。フランス

震撼す

(2) Napoleon.
Bonaparte.
(西暦一七六
九年—一八二
一年)

精神的英雄

(3) Beethoven.
(西暦一七七
七年—一八二
七年)
(4) Victor Marie
Hugo.
(西暦一八〇
五年—一八八〇
五年)

一八 ベートーヴェン

十八世紀の末に於て、ヨーロッパは一人の大英雄を産みだしました。(一) コルシカの一孤島から現れて、フランス革命の風雲に乘じ、遂には皇帝の位に登り、全ヨーロッパを震撼せしめたナポレオンの名は、よし西洋史を繙かない人でも、知らない者はないでせう。けれども皆さんは、これと時代を同じうして、恐らくはナポレオンより更に偉大な精神的英雄がドイツに現れたことを、忘れてはなりません。英雄とは即ち(二) ベートーヴェンその人であります。

誰かがフランスの文豪(四) ヴィクトル・ユーゴーと、その傑作

「^{レミゼラブル}哀史」に就いて、次のやうなことを言つたと覺えてゐます。曰く、「ナポレオンの名が人々の記憶から失はれてしまつても、ユーゴーの名が忘れられることはないであらう。千載の後には、人々が『哀史』を繙いて、『この頃フランスにナポレオンといふ皇帝があつたさうだ。』といふやうになるに違ない。」と。同じやうなことは、ベートーヴェンとナポレオンに就いても、言ふことが出来るでせう。今日では、ベートーヴェンの「英雄^(一)シムフォニー」が、ナポレオンに捧げらるべき筈であつたといふ意味で、特に有名になつてゐますが、やがてはナポレオンの名が「英雄シムフォニー」と結びつけられることによつてのみ、音樂の好きな人の頭のなかに浮んで来るやうにな

やがては
(Symphony.
(交響樂))

通俗的英雄
知己を千載
の後に待つ



ベートルヴェン

るに違ありません。
藝術家の仕事といふものは、はでなやうに見えて、その實、將軍や政治家などの通俗的英雄のそのやうに、華やかなものではありません。知己を千載の後に待つといふ言葉の通り、彼等は自分の存世中に酬いられるところは少いのでした。勿論ベートーヴェンの藝術は、ベートルヴェンの生きてゐる間にも、認められてゐたには相違ありませんが、しかしそれは果して、ベートーヴェンの酬いらるべきすべてに値したでせうか。恐らくベートルヴェ

エンの時代に於て、彼の偉大さをナポレオンに比較し、又その一篇のシムフォニーを、ナポレオンのヨーロッパ征服や、法典の制定にもまして有意義であると申しましたならば、人々はそれを狂者の言としかなかつたでせう。しかし今日冷靜に考へて見ますと、ナポレオンの遺した事業よりは、ベートーヴェンの遺した作品の方が、遙かに人類の精神生活に貢献するところが、多大であると申さねばなりません。なるほど一人のナポレオンが存在しなかつたならば、今日の世界地圖、少くともヨーロッパ地圖は、或は色彩を異にしてゐたかも知れません。けれども地圖の上の色彩がいかやうであつても、人類の思潮は、當然進むべき所に進みつゝあ

恩潮

貢
貢
貢

北
北
北

その時代
その時代
その時代

カ
カ
カ

るでせう。しかし若し一人のベートーヴェンがなかつたら、あのやうな雄大なシムフォニーは、永久に現れなかつたに違ありません。命は短く、藝術は永し。といひますが、ナポレオンが忘れられても、ベートーヴェンは永久に生きるでせう。

——前田三男の文による——

自修文

一九 月光の曲

音楽家としてのベートーヴェンは、ドイツでは子供でもその名を知らないものはない。ベートーヴェンは一千七百七十年にライン河に沿うたボン^(一)といふ町に生まれて、一千八百二十七年にオーストリアの首府ヴィーン^(二)で死んだ人である。

まだボンに居た時の事であつた。物凄く寒い冬の月が冴えきつた

(一) Bonn.
(二) Austria.
(三) (奥地利)
Vienna.
(維也納)

たゝずむ
たちどまる。
はたと
ばつたりと。
(Kon.)

やをら
しづかに。

冬の夜、友人とともに散歩して、細い小路を通りかゝつた時、俄に足を止めて、「あれは僕の作つた曲だ。いかにも上手に弾いて居る。」と獨言のやうに言つた。それは小さい賤しげな家の前であつた。二人は戸外にたゞずんで暫く聽いて居たが、やがてピアノの音がはたと止んだ。私にはもうとても弾けません。何といふ美しい曲でせう。一度ケルンの演奏會へ行つて見たい。」と情ないやうに言つて居るのは、若い女の聲である。家賃さへ拂へない今の身の上で、どうしてそれが出來よう。」といふのは男の聲である。

ベートーヴェンはやをら戸を開けて、その家にはいつた薄暗い燈火の下で、青ざめた元氣のなさうな若い男が靴を縫つて居る。その傍にゆたかな髪の毛を額に漂はせて、一人の娘が古いピアノの前に坐つて居る。知らない人が不意にはいつて來たので、二人は驚いた様子。

一曲
ひとふし。

體
やうす。

樂譜
音樂の譜。
子な符號で記調したものを。

面相
かほつき。

異様
うはつき。

とみに
急に。

乗移る
何の靈がその身にやどる。人間わざとは見えないのていふ。神に入る。ふしぎにすぐされて居て神である。

「御めん下さい。私は音楽者ですが、餘りの面白さに、つい釣りこまれて参りました。私にも一曲弾かせて下さい。」とベートーヴェンが言つた。娘の顔は紅に染まつた。青年はむつとりとして困つた體である。有難うございますが、私どものピアノは、誠に粗末で、それに樂譜もございません。」と男が言ふ。

ベートーヴェンは「樂譜がない。それでどうして。」と言ひさして、見ればかはいさうに、娘は盲である。

「これで澤山です。」といひながら、ベートーヴェンはピアノの前に腰を掛けて、すぐに弾きはじめた。その最初の一音が、すでにその兄弟の耳には不思議に響いた。ベートーヴェンの面相は見る見る變つた。両眼は異様に輝いて、彼の身には、とみに何物か乗移つたやうに見える。一音は一音より妙を加へ神に入つて、ベートーヴェンはすでに何を弾いて居るか覺えないやうである。兄弟

感に打たる
ひどく感心す

我を忘る
聞きとれては
んやりする

奏づ

うなだれる
くびなれる

沈思
しづかにおも

はうつとりして、びたすら感に打たれてゐる。兄は手に持った靴を取落して、驚きの目を見張ったとき、妹は少し頭を前に傾け、両手をしかと胸に押當てて、その心臓の響が、この美しい音を少しでも亂さぬやうにと、ピアノの傍にうづくまつてゐる。ベートーヴェンの友人も全く我を忘れて、一同夢に夢見る心地である。蠟燭の火が俄に消えた。友人は起つて窓の戸を開けると、青い月の光は、ピアノと、ピアノを奏でる人の顔を照らした。ベートーヴェンは弾く手を止めて、首をうなだれて、沈思の體である。暫くして兄は恐る／＼近寄つて、熱心な、しかも低い聲で言つた、あなたははどうした御方です。」

「まあ御聴き下さい。」と制して、ベートーヴェンはまた弾きはじめた。嗚呼、あなたはベートーヴェン先生ですか。」と、兄妹は思はず叫んだ。

月影隈なく
月に少しの雲
もなくて居るの
を照らす

舞踏曲

用ひる歌の時ふ

妖精

ばけもの。

奔流云々

水勢よく流れる

しきりか、巖におそる

に當つて、岸

白化して行く面

極めて居る。

萬感交、至

る。

徹す

月は益々渡つた。この月の光を題に一曲を。」といつて、ベートーヴェンは暫く月影隈なく、星まばらな大空を眺めて居たが、やをら指はピアノに觸れたかと思ふと、優しい沈んだ調は、恰も東の山の端に昇つた月が、次第々々に闇の世界を照らすが如く、靜かに、柔に響き始めた。次いで来る奇怪な舞踏曲の物凄さ。妖精の夜出て庭の芝生に狂ふ如く、最後の快速の調は飛ぶが如く、閃くが如く、奔流巖に激し、怒濤岸を噛み、具に變幻の妙を極めた。三人はたゞ悲しみ、喜び、驚き、恐れ、萬感交、至つて、遂に茫然として自失してしまつた。

弾き終るとベートーヴェンは、今の曲を忘れない中に譜にしたいからといつて、走るやうにして歸つたが、その夜は机に向つて、遂に夜を徹したのであつた。これがベートーヴェンの月光の曲といつて、不朽の名聲を博した曲である。――國定高等小學讀本――

(一)駿河國志太東岸。大井川の
 (二)遠江國榛原郡。大井川の
 (三)甲斐の白根山に發し、駿河、遠江の國境をなす。長さ四十八里。
 はしやく

二〇 冬枯の大井川 千葉 龜雄

東海道島田の驛はここに盡きた。この川一つを向ふへ渡れば、そこがすぐ金谷の町だ。といふ。今、大井川の冬枯の堤に立つ。

飽くまではしやぎつた初冬の空は、底も知れぬほどに凝つて蒼く、見るも寒げに、高くく澄んで居る。白い雲が、時ほつちり浮んでは、又一たまりもなく吹流される。風の風いだ大海に、白い帆影が現れては、又すべつて行くとも思はれる。日影は小春日のやうに暖いが、風は飽くまで冷たく骨を刺す。岸の川柳の葉が半ば枯れて、ほろくくと水に零れる。

名にし負ふ
 (一)信濃國諏訪湖に發し、遠江に注ぐ。長さ五十六里。
 (二)甲斐國に發し、身延山の麓を過ぎ、駿河に注ぐ。
 随一
 (三)Sepia

肩をすばめて、うつむいて泣いてゐるのではあるまいか。名も知らぬ小鳥が、矢のやうにひよいくと飛んで出ては、劈くやうな細い聲でひいくと啼いて行く。冬が來た。宿がなくなつた。と泣くのかも知れぬ。名にし負ふ天龍、富士と押並んで、東海道随一の大河と呼ばれたこの大井川も、今は瀬が涸れ、水が落ちて、廣さ何町といふ石ばかりの河原が、一面のセピヤ色に眼前に展開されて居る。見渡す河上も、河下も皆磧である。石といつても、幾百年となく激流に洗はれて、握飯のやうに圓くなつて、灰色に晒されたごろた石だ。その灰茶色の石原の中を、幾つにも割つてちろくと白く動くのは、大井川の流であらう。白い流水は、日光を浴びて青く緑に閃

瀬枕立つ



今の大井川

き、小石を噛み、大石を噛んで、
 瀬枕立てて滔々と流れて行く。
 小鳥の時たまに啼く聲が、
 他界からでも来るやうに響く。
 外には、河の兩岸のこの眞
 晝を、寂として鍛冶屋の鋸音
 一つ響かない。若し夢に容が
 あらば、この静寂が即ち夢の
 容であらう。若し夢に聲があ
 らば、この流の聲が即ち夢の
 聲であらう。水は滔々として



昔の大井川 (廣重筆)

百年二百年の夢を見て、夢の
 やうに流れて居る。岸に立つ
 人亦恍として、いつしか二百
 年三百年の昔の夢を繰返さ
 ざるを得ない。
 「箱根八里は馬でも越すが、
 越すに越されぬ大井川。」
 どことなく長閑な馬の鈴
 がちやらん／＼と鳴つて、空
 にも入れよ、地にも徹れよと
 清しい馬子唄の聲が夢に入

る。あゝ、富士といはず、天龍といはず、一葉の船、一本の棹で越されぬ河流がどこにあらうか。獨り大井川だけが、船で越すことを許されなかつた。徳川幕府が江戸に移つて、始めて關東を經營するとともに、大井川を東海一の要害と見た。若し船で上流に溯り、下流に下つて、この河の形勢を見極める者があれば、天下の守は悉くこれから破れる。乃ち令して川越を行はせたと、土地の歴史に精しい人は説く。

かくて裸一貫の荒くれ者は、川越人足の名をもつて、東海道唯一の名物となつた。さしも鬼を取挫ぐ剛情武士も、その背に負はれては、ぐうの音も出ず、島田、金谷の全盛目を驚かしたのも、今は昔だ。汽車で通つてしまふ今日では、寢てこそ

渡れ大井川。その大井川の冬枯の岸に、今初冬の日光を滿身に浴びて立てば、盡きせぬ流の聲も無意味に聞く事は出來ぬ。石に碎けて咽ぶのは、昔の全盛を聞け。」と語るのではない。か。今のさびしさに泣いて居るのではないか。自分はゆふべ日が暮れて島田の驛に降りた。降りる人は僅かに一人二人。狭いプラットホームを潜つて驛を出ても、人力車一つあるではない。風が海のやうに吼えて居た。寂然として眠つた山の影が、くつきりとくぎつた空線の上に、滿天の星の光が冴えて、ぶる／＼と震へて居た。舊式な懸行燈の火影をたよりに、鞆たづなを抱へて、舊驛の一夜の宿を探した自分は、今更に島田の宿の衰頽を泣かざるを得なかつた。

二 心の洗濯

柴田鳩翁

日ざし

釜の中に蜘蛛の巣がはる

江戸神田邊に、至つて貧乏な大根賣がありました。或日例の通り一荷の大根をになひ、朝早うから賣歩いたが、どうした事やら、その日は一把の大根も賣れぬ。日ざしを見れば、はや晝すぎ、腹の時計は八つさがり、財布の中にはまだ一文の錢もたまらぬ。これはつまらぬ。この大根が暮方までに七百文の錢に化けぬと、忽ちあすは釜の中に蜘蛛の巣がはる。どうしたらよからうと工夫しながら、いつの間にやら兩國橋を渡り、本所の屋敷町を、大根。大根。と賣歩いた。

或御屋敷の表長屋の窓の内から、これ大根屋。と呼ぶ。やれ

知行

うれしや、まづ知行にありついたと、呼ぶ所を見れば、表御門から右へ三つ目の窓の内から呼んだのぢや。そこで大根屋が、表御門から荷を擔ひこんで、お長屋へ廻つて見ると、門から三軒目の高塀のうち、門口には何某と標札が打つてある。荷を持込んで見れば、縁先の障子をあげ、旦那殿が今月代を剃られたと見えて、鏡立に向うて自分の髪を結びながら、「その大根はいくらぢや。」といふ。百に三把でございます。といへば、それは高い。二十四文づつにして置け。といはれる。賣りたさは賣りたけれども、現在損のたつ事なれば、どうぞ三把にお買ひなされて下されい。けさから江戸中を泣歩いて、まだ一把も賣れません。どうでも賣つて歸らねばならぬ大根、

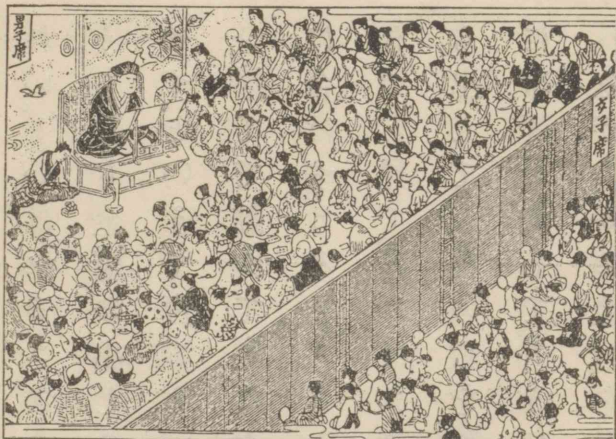
懸直

懸直は一切申しません。」といふ。彼のお侍かぶりふり、それでも高い。まからずばまづよしにせう。」と言捨てて、縁先の障子をはたと締められた。

大根屋もいろ／＼と、言うて見ても、かのお侍が相手にならぬ。そこでしやうもやうもなく、はてつまらぬ。もう日の入には間もなし。何でも四百の銭を持つて歸らぬと、親子五人があすの命が繋がれぬ。何としたものであらう。」と手を組んで思案をしながら、縁先の金盥にふつと目がついた。障子は締めてある。あたりに見る人はなし。かの金盥を水の入ったまゝで、大根二三把の下へそつと隠す。怖いものぢや、今まで廣かつた世界が立ちどころに狭うなつて、五尺の身體を暫

くも置くべき所がない。

ぬからぬ顔



そこで荷を擔ぎ出して、門口を出ようとすると、障子の内から、こ心れ大根屋。」呼びかけられる。ぬか學らぬ顔で、「まかりません。」といふと、の「いや／＼、直はねぎるまい。その大講根買はう。」といひさま、障子をさら義りと明けられた。

大根屋もびつくりしたが、どうぞして逃げて去なうと思ひ、何把ほど入ります。はした賣は出来ません。」といふ。いや／＼、は

きつう

したでは買はぬ。その大根みな買はう。この縁先へ並べてくれい。」といはれる。さあ大根屋も一所懸命。障子の締つてあるうちなら、金盃の出しやうもあらうに、今更金盃が出されもせず。というて賣るまいともいはれず。逃げて行かうにも、荷を捨てて歸つてはならず。千百萬の後悔も、今になつては間に合はず、うろ／＼としてゐると、かのお侍が、大根屋の顔をきつと見て、「われはきつううろたへて居るぞよ。まづ金盃から出して、大根の數を數へて見よ。」といはれる。大根屋は總身に冷汗を流して、もう切られるか、ぶたれるかと、わな／＼震へながら、かの金盃を耻づかしさうにそつと出して、土に手をつき、「旦那様、眞平御免なされて下されませ。何をかくしま

根性

氣だて

せう。先刻も申します通り、けさからまだ一文の商もいたしませず、このまゝ歸りますと、あす親子五人がたべます事になります。悲しい貧のぬすみ根性、面目次第もござりません。七つを頭に子供が三人、どうぞ親子五人が命をお助けなされて下さりませ。」と色青ざめて、土にあたまをすりつけて、詫言をする。

彼のお侍、思の外氣立のよい人で、更に立腹の氣色も見えず。いや／＼、その詫言には及ばぬ。まづ大根の數をよんで見よ。」といはれる。こは／＼ながら大根を縁へ積上げたところが二十三把。かのお侍大根賣を呼んで、「さあ、其方がいふ通り、二十三把七百六十四文、序に金盃を添へて遣はす。貧のぬす

みとはいひながら、われが根性はよほど汚れてあると見える。この金盥は、顔や手足を洗ふ道具なれども、心の洗ひやうもあるものぢや。持つて歸つてとつくりと思案をし、心の垢を洗ひ落せ。」と言捨てて、障子を締めて内へはいる。かの大根屋もこれから本心になつて、夜晝働き、三年目には終に相應な八百屋になつたといふ事であります。

——鳩翁道話——

鳩翁道話

二二 國歌の話

一國の音楽が、どれほどその國の人情に左右されるかといふことは、國歌などを見ると最もよくわかる。實に國歌の比較は、一面には國々の國體を比較することにもなり、又そ

マルセーエ

マールセイユ (La
Marseillaise)

國の子等光

榮の日に來
る血に染め

る虐主の旗は
吾等に向つて

野掲
こげ
れぬ

野に呼ぶの
しる暴兵の聲

吾子等を屠

荒す。武器を

とれ市民等
よ。隊伍を作

りて進め進め
鮮血は吾

とがす^し畦を浸さん

貴族的好尚

1871

の國民の氣風性質などを知る便ともなる。今試みに西洋の三大音樂國といはれてゐるイタリー、フランス、ドイツ三國について、その國歌を較べて見よう。

最初まづフランスの國歌マルセーエイズ曲に就いて考へて見ると、これには貴族的好尚に對する反抗が表れてゐて、甚だしく平民的傾向を帶びて居る。随つて國歌の上に尊嚴といふものがない。そのかはり、感情は實に遺憾なく表れて居る。一體感情を極端に表すといふことが、フランス音樂の一つの特徴となつて居るのであるが、この國歌には、殊にこれが著しい。この意味でマルセーエイズ曲は、眞にフランス人民を代表する國歌として、ふさはしいものである。

剽悍勇猛

次にドイツの國歌を見ると、これは全くフランスの反對である。ドイツ國民は頗る剽悍勇猛であると同時に、又理性が明らかで、徒に感情に走らない。随つて感情中心のフランス音樂などとは大いに違つて居る。この國には古來愛國的歌謠が頗る多いが、その愛國心といふのがまた我が國や、イギリス、ロシヤなどと甚だ違つて居る。我が國は全然皇室中心主義であつて、愛國といふことは、即ち皇室を尊重することである。然るにドイツの愛國は、自國が他國に對して戰勝を得ることを喜ぶといふだけの思想から起つた愛國心である。随つて國歌は皇室尊崇などよりは、他國に對する威壓を以て第一の目的として居るのである。この點がドイツ國

義皇室中心主

ラインの守
 「聲は雷の如
 く、劍の響と如
 く、音のと交り
 て出ゆ。ライ
 ン、ドイツ國
 といふ、この河
 と。この河の
 防禦者は誰
 ぞ、安んじよ
 愛する祖國
 ライン河の守
 は立てり。堅
 固に、且忠實
 に。」
 ドイツ人の
 祖國云々
 「ドイツ人の
 祖國、イッづ
 こそプロシヤ
 び、はたスロ
 ビアの、葡萄
 の實のるライ
 ンの岸か。鴨
 の泳ぐ、バル
 ックの湖へ
 否、否、我
 國は更に大
 なるべし」
 (Royal March
 of Italy.

歌の特徴である。それは準國歌たる「ラインの守」及び同じく準國歌たる「ドイツ人の祖國は何處か」を見るとよくわかる。かやうにドイツの國歌とフランスの國歌を比較すると、ドイツのが威壓的であるのに反して、フランスのは反抗的である。ドイツのが理性的であるのに反して、フランスのは感情的である。實にこの兩國の國歌を見ただけで、歐洲大戦争の光景が、目に見えるやうに感ぜられる。

翻つてイタリーはどうであるか。普通イタリーの國歌といへば「ロイヤルマーチ・オヴ・イタリー」と稱せられる軍歌風の進行曲であつて、歌ではない。これはなかく面白く愉快に出来ては居るが、尊嚴といふ感じは少い。餘り巧に作り過

流露

ヤラハレ

(一)西暦一八六一
年

ぎてあつて、國民の眞情が流露して居ない。これは全くこの國の歴史によるのである。イタリーが現今のやうに統一されて帝國となつたのは、今から僅か六十年ほど前であつて、その時から始めて國家といふ觀念が急に勃興し、随つて愛國の歌謠も現れて來た。國歌のロイヤルマーチはこの時に生じたのである。けれども元來永い間の精神修養によつて出來た愛國心ではなくて、歴史上の變動の爲に急に現れて來たものであるから、どうも國民の眞情が流露してゐない憾がある。且又イタリーでは從來音樂が頗る發達して、作曲法の技も進んで居たものだから、國歌が内容よりも寧ろ形式に流れてしまつて、國歌としては餘りに曲が上手過ぎ、飾

り過ぎてゐる。さて日本の國歌はどうであらうか。

(一)宮内省雅樂部
副長、明治二
十九年、
六十六年

旋律

カニマフ

「君が代」は宮内省雅樂部の林廣守の作曲で、割合に新しいものであるに係らず、イタリーのとは大いにその性質を異にして居て、非常に尊嚴なものである。今日我が國の國旗なる旭日の意匠と、國歌なる「君が代」の旋律とは、確かに世界に對して我が國の威嚴を示す表徴となつて居るといつてよい。君が代の作曲は一度外國人が手を着けたけれども、不成功に終つた。その後、林氏が全然古代の雅樂に則とつて作られたのが、現今の「君が代」である。我が國歌が、かゝる宮中の雅樂師、しかもその老輩の手に成つたといふのは、ちよつと異様であるが、實はそれが我が國の大幸福であつたのである。

一體我が國上代の音樂は、眞の大和民族の眞情を流露した音樂である。かの神武天皇御作の久米舞などは、いかにも雄大且壯嚴なもので、これを宮中の饗宴に於て拜する外國の使臣は、皆その結構の偉いのに驚嘆するといふことである。かやうに、大和民族本來の特性を失はずに、それに最もふさはしい形式の備つた音樂がいはゆる雅樂である。さうしてこれを大體保留して傳へて居た宮中の雅樂師が、「君が代」を作曲したのであるから、それが大和民族本來の性情を具へて居て、しかも形式に於て可なり立派なものであるといふのは、當然のことである。

——田邊尚雄の文による——

二三 元 日

夏 目 漱 石

(1) Frockcoat.

(2) Melton.

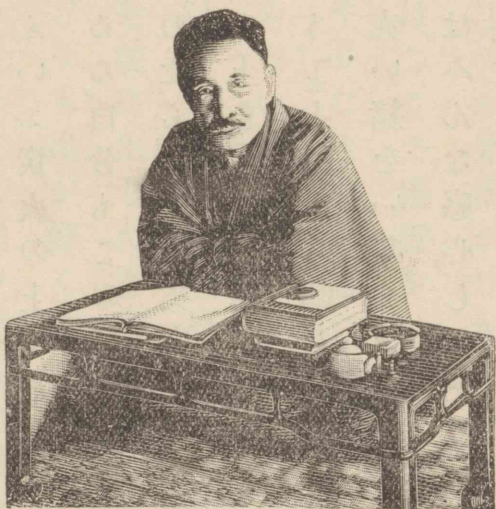
雜煮を食べて書齋に引取ると、暫くして三四人來た。いづれも若い男である。その中の一人がフロック(1)を着てゐる。着なれないせい(2)か、メルトン(2)に對して妙に遠慮する傾がある。あとのものは皆和服で、且不斷着のまゝだから、頓と正月らしくない。この連中がフロックを眺めて、「やあ。やあ。」と一つづついつた。みんな驚いた證據である。自分も一番あとで、「やあ。」といった。

フロックは白い手巾(3)を出して、用もない顔を拭いた。さうして頻りに屠蘇を飲んだ。ほかの連中も大いに膳のものを突つついてゐる。ところへ虚子(3)が車で來た。これは黒い羽織

(3) 高濱清。俳人。
愛媛縣松山の

に黒い紋附を着て、極めて舊式にきまつてゐる。あなたは黒紋附を持つてゐますか。やはり能（うまい）をやるから、その必要があるんでせう。」と聞いたら、虚子が「え、さうです。」と答へた。さうして、「一つ謠ひませんか。」と言出した。自分は「謠つてもようござんす。」と應じた。

それから二人して「東北」を謠つた。餘程以前に習つただけで、殆ど復習といふ事をやらないから、所々甚だ曖昧である。その上、我ながらおぼつかない聲が出た。漸く謠つてしまふと、聽いてゐる若い連中が、申し合はせたやうに、自分をまづいと言出した。中にもフロックは、あなたの聲はひよろ／＼してゐる。」と言つた。この連中は、元來謠の「う」の字も心得ない



夏目漱石

ものどもである。だから虚子と自分の優劣はとても分らないだらうと思つてゐた。しかし、批評（ひひやう）をされて見ると、素人でも理の當然なところだから、已むを得ない。「ばかをいへ。」といふ勇氣も出なかつた。すると虚子が、近來鼓を習つてゐるといふ話を始めた。謠の「う」の字も知らない連中が、「一つ打つて御覽なさい。是非お聞かせなさい。」と所望してゐる。虚子は自分に、「ぢや、あなた謠つて下さい。」と依頼した。これは囃（は）の何物たるを知らない

所望

斬新

自分に取つては、迷惑でもあつたが、又斬新といふ興味もあつた。謠ひませう。」と引受けた。虚子は車夫を走らして、鼓を取寄せた。鼓が來ると、臺所から七輪を持つて來さして、かんかんいふ炭火の上で、鼓の皮を焙^あり始めた。みんな驚いて見てゐる。自分もこの猛烈な焙方には驚いた。大丈夫ですか。」と尋ねたら、「えゝ、大丈夫です。」と答へながら、指の先で張切つた皮の上を、「かん」と弾いた。ちよつと好い音がした。もういいでせう。」と七輪から卸して、鼓の緒を締めにかゝつた。紋服の男が赤い緒をいちくつてゐるところが、何となく品がよい。今度はみんな感心して見てゐる。

虚子はやがて羽織を脱いだ。さうして鼓を抱へこんだ。自

領承す

萎靡因循
コロロコロ
スルコト

分は「すこし待つてくれ。」と頼んだ。第一、彼がどこいらで鼓を打つか、見當がつかないから、ちよつと打合せをしたい。虚子は、ここで掛聲をいくつ掛けて、ここで鼓をどう打つから、おやりなさいと、懇に説明してくれた。自分にはとても呑みこめない。けれども合點の行くまで研究してゐれば、二三時間ばかり。己むを得ず、好い加減に領承した。そこで「羽衣」の曲を謠ひ出した。春霞たなびきにけり。」と半行ほど來るうちに、どうも出が好くなかつたと後悔し始めた。甚だ無勢力である。けれども途中から急に振ひ出しては、總體の調子が崩れるから、萎靡因循のまゝ、少し押して行くと、虚子がやにはに大きな掛聲をかけて、鼓を「かん」と一つ打つた。

威嚇ヒキウす

皮肉

自分は虚子がかう猛烈に來ようとは、夢にも豫期してゐなかつた。元來が優美な、悠長なものとはばかり考へてゐた掛聲は、丸で眞劔勝負のそのやうに、自分の鼓膜を動かした。自分の謠は、この掛聲で二三度波を打つた。それが漸く靜まりかけた時に、虚子が又腹一杯に横合から威嚇した。自分の聲は威嚇される度に、よろ／＼する。さうして小さくなる。暫くすると、聞いてゐるものがくす／＼笑ひ出した。自分も内心からばか／＼しくなつた。その時フロックが眞先に立つて、どつと吹出した。自分も調子につれて、一緒に吹出した。それから散々な批評を受けた。中にもフロックのは最も皮肉であつた。虚子は微笑しながら、仕方なしに自分の鼓に、

自分の謠を合はせて、めでたく謠ひ納めた。やがて、まだ廻らなければならぬ所があるといつて、車に乗つて歸つて行つた。

——漱石全集——

二四 朗 詠

春

「東岸西岸之柳、遅速不同、南枝北枝之梅、開落已異。」

「池冷水無三伏夏、松高風有ニ一聲秋。」

夏

東岸西岸の柳、遅速同じからず、
南枝北枝の梅、開落已に異なり。
夏
池冷やかにして、水に三伏の夏なく、
松高うして、風に一聲の秋あり。

「秋水漲來船去速、夜雲收盡月行遲。」

秋水漲り來りて、船の去ること速く、夜雲収り盡きて、月の行くこと遅し。

冬

「寒流帶月、澄如鏡、夕吹和霜、利似刀。」

寒流月を帶びて、澄めること鏡の如く、夕吹霜に和して、利きこと刀に似たり。

旅

「孤館宿時、風帶雨、遠帆歸處、水連雲。」

孤館にやざる時、風は雨を帶び、遠帆のかへる處、水は雲に連る。

祝

「長生殿裏春秋富、不老門前日月遲。」

長生殿の裏には春秋富み、不老門の前には日月遅し。

自修文

二五 七福神

創意 おもひつき。
狩衣 昔狩や旅行などの時に着た衣服。

惠比須大黒毘沙門、辨天、壽老人、福祿壽、布袋を七福神と稱へて、一幅の畫にゑがく事、足利時代に始りし事と思はるれども、何人の創意に出でたるかを知らず。七福神が寶船に乗りたる繪を正月二日の夜に枕の下に敷く事も、足利時代よりの習はしなり。さて七福神の中、惠比須のみは日本の狩衣姿なり。釣竿を肩にし鯛を抱へたる、漁業につとめ、魚類を常食とする日本人の福神としてふさはし。商家にては、毎年十月これを祭りて惠比壽講といふ。

大黒はもと印度の神なり。臺所を掌るといへば、食物には縁あるべし。打出の小槌を手にして俵を踏まへたるは、その姿の日本

混淆
まぜこぜ。

(一)梵天帝釋の武
將。持國天王、
廣目天王、多聞
天王、毘沙門天
王。

化したるなるべし。これを大國主神と混同せるは、神佛混淆の結
果なり。

毘沙門は佛教守護の四天王の一、武勇の神。辨天は七福神中唯
一の女神にして、もとは辯舌の神なりしが、辨財天といふより、後
には財寶の神としてあがめられしなるべし。毘沙門、辨天ともに、
大黒と同じくその本國は印度なり。

壽老人、福祿壽、布袋三神の國籍は支那なり。壽老人はその名の
示す如く、長壽の神として喜ばれたるなるべく、福祿壽は壽の上
に福と祿とを持ちたれば尙更なり。布袋のみは支那の歴史上に
現存したる人物にて、或寺の僧なりき。小兒を愛して常にこれと
戯れたりといへば、兒福者の意味もあるべし。

衣食財寶に不自由なく、無病息災に子孫繁昌するは、人生生活
として最大なる幸福なり。されば七福神をあがめて、この幸福に

息災
ふじ。まめ。た
つしや。

文化
世のひらけた
さま。

(一)福島縣刈田
町。今は白石
町。

狐梟のすみ
か。

あやからんとせし古代人の思想も了解せらるべし。さて又日本、
支那、印度と國籍の三つに分れたるも、當時の日本文化の有様を
知るに足るべきなり。

二六 甲冑堂

奥州白石^(一)の城下より一里半南に、齋川といふ驛あり。こ
の齋川の町末に、高福寺といふ寺あり。奥州筋近年の凶作
に、この寺も大破に及び、住持となりても食物乏しければ、
僧も住まず、空寺となり、本尊だに何方へ取納めしにや、寺
には見えず。庭は草深く、誠に狐、梟のすみかといふも餘り
あり。この寺に又一つの小堂あり、俗に甲冑堂といふ。堂の

書付には故將堂とあり。大いさ僅かに二間四方ばかりの小堂なり。本尊だに右の如くなれば、この小堂の破損はいふまでもなし。やう／＼に縁にあがり見るに、内に佛とてもなく、たゞ婦人の甲冑して長刀を持ちたる木像二つを安置せり。いかなる人の像にかと尋ぬるに、佐藤繼信、忠信の妻なりとかや。

(一)醫者兼文學者。文化二年(二四六五年)歿。

これ今より百餘年前橋南谿が東遊記に記せる所なり。繼信、忠信は源義經の家來なり。平家の盛なりし頃、義經は奥州に下りて身を藤原秀衡に寄せしが、兄頼朝の兵を擧ぐる由聞きて、急ぎて鎌倉へ馳參じぬ。繼信兄弟も從ひ行きしに、その後義經京都へ攻上り、平家を追落して武功著しかり

形見ばかり歸る

痛手

しかども、頼朝と不和になりて、再び奥州さして落延びたり。然るに、繼信は屋島の合戦に能登守教經の矢に中りて斃れ、忠信も京都にて討たれしかば、同じく從ひ出でたりし龜井、片岡等の人々は無事にて歸國せしに、繼信兄弟は形見ばかり歸りぬ。母は悲みに堪へず、せめて二人の中の一人にても歸りたらばと、悲歎の涙やむ時なし。兄弟の妻は母の心根を察し、やがて夫の甲冑を取出し、勇ましげにいでたちて、母の前に跪き、兄弟たゞ今凱陣いたし候ひぬ。と言ひしかば、母も二人の嫁の志を喜びて、涙ををさめてほ／＼笑みたりとぞ。繼信の主と頼みし義經に忠なりしは、屋島の戦に教經の矢面に立ちて、主の命に代りしにても知るべし。義經は痛手

今はの一言

を負へる繼信をいたはりて、一所にとてこそ契りしに、先立つることの悲しさよ。思ひ置く事あらば言へかし。」といへば、繼信苦しげなる息の下に、「敵の矢に中りて主君の命に代るは、弓矢取る身の習、更に恨にあらず。たゞ思ふところは、故郷に遣し置きし老母の身の上なり。弟なる忠信をば行末かけて召使ひ給へ。」とばかり言ひて、やがて息絶えたり。今はの一言に母への孝心、弟への友愛、これを聞ける兵も皆鎧の袖を絞りぬ。弟の忠信が吉野の山に踏止りて、多勢の敵と戦ひ、義經を落しやりし武勇義烈は、兄にも劣らずといふべし。妻なる二人の婦人が、深き悲みを押包みて、母を慰めんとせし健さ、雄々しさ、うち揃ひての忠孝、世にもめでたき例ならずや。

(一) 桃隣の句。

(二) 小華山人の句。

(窓)

時の人のその姿を木像に刻みて、この堂を建てしも、故あるかな。ここに詣でし俳人の句に、

(一) 軍めく二人の嫁や花あやめ

(二) 卯の花や緘毛ゆゝし女武者

明治八年この小堂火災に罹り、像もともに焼失せたりとぞ。

— 國定高等小學讀本 —

二七 郷里の祖母へ 樋口一葉

今朝は風まぐらうと北風の部屋は寒すう明
けかたきやうにはなまきりてふおち―烈しき
し地はいのどかりと父母とも―はあまじく

山崎政居

(歳暮)

御祖母様よりゝの寒さに少障もあせられ
すゝや寒氣に伯父様より又たまはり首相
変らずすゝやゝゝゝ伯母様もあひなきほど
お肉の活用何れと遊ばさるゝ由なり又母姑の私
どもも、うけうなぐ花の頃にも相成りけり
兄上と少地へお遊に参りお誘ひやりして野向
島の人出お目にかゝるゝもかなふべしと一回常々
居ひ今十日程にて寒夜明けとも餘寒はなほ
ますゝものゝ、お身は大切に風をしの給はぬ

やうなれども新去つたなまゝ出来にはと私
うゝゝの綿入小包郵便に、お送りやりお返の
下に、お受けられたい母よりは例のカステラを
どれ二箇中には着きやりすゝや

當地より誰も誰もあつたかゝる父は昨年
おゝゝゝゝ昇進致しお喜びられたいは
今年始末お出しお申上げお返しを、お返し
たれば甚方よりお申附に、お返しお返し様へも
おゝゝゝゝお返しお返しお返し

——通俗書簡文——

二八 努力と奮闘と嗜好 幸田露伴

人間の所爲は随分多數に分類することが出来る。そしてその所爲の價值には幾千となく階級もあらうが、努力は確かにその高貴な部分に屬するものである。奮闘といふ言葉は、努力と稍近似の意味を表して居るが、これは假想の敵があるやうな場合に適當するもので、努力は我が敵の有無に拘らず、自己の最良を盡して、或事に努力する意味で、奮闘といふ意味が有する感情、意義よりは高大で、公正で、明白で、人間の眞面目な意義を發揮して居る。元來一切の世界の文明は、この努力の二字に根ざして、そこから芽を發し、枝をつけ、

自己の最良
を盡す
公正

嗜好

並行線的

同一線的

葉を生じ、花を開くのであると言はねばならぬ。

しかし努力に比して、その相手のやうに見えるものがある。それは嗜好、即ち好んで爲すといふことである。努力は厭な事をも忍んで爲し、苦しい思にも堪へて勞に服し、事に當るといふ意味であるが、嗜好といふ場合には、苦しい事も打忘れ、厭ふといふ感情も全くなくて、即ち意志と感情が並行線的、若しくは同一線的に働いて居る場合をいふのである。努力はそれと稍違つた意味を有し、意志と感情が相忤し、戻つて居る場合でも、意識の火を燃立たせて、感情の水に負けぬやうに爲し、そして熱して己まぬのをいふ。

或人が或事に従事し、そしてその人が、我知らず自己の全

力を其處に没して事に當るといふ場合、それは努力といふよりは、好んで爲すと言つた方が適當である。其處で世界の文明は努力から生じて居るか、好んでこれを爲す處から生じて居るかと言へば、努力から生じて居る如く見える場合も、嗜好から生じて居るが如く見える場合もある。例へば、文明の恩人、即ち各時代の俊秀な人物が、或事業の爲に働いて、その徳澤を後世に遺した場合を考へて見るに、努力の結果の如く見える場合もあり、又好んで爲した結果の如く見える場合もある。これは人々の觀察、解釋、批評の仕方因つてどちらにも取れるが、正當に解釋して見たならば、好んで爲す場合にも、努力が伴はぬ時は、その進行を廢絶せざるを

俊秀

徳澤

批評

(1) Palissy.
人。各種の色
彩模様を陶器
に應用す。西曆
一五〇九年
一五八九年
(2) Columbus.
イタリヤ
人。西曆一
四九二年
一四九八年
一五〇〇年
一五〇六年

得ない。然らずとするも、偉大な結果を期することは出來ない。(1)パリスシーの陶器製造に於けるも、(2)コロンプスの新地發見に於けるも、皆さうである。いかに好んで爲すといつても、例へば、有福の人が園藝に従事する場合に就いても、或時は確かにそれは苦痛を感じしめる。即ち手數、緻密な觀察、時間的不規律な勞動に服する等の種々の場合に、努力によらなければ、途中で止むの狀態に立至ることもまゝある道理で、換言すれば、好んで爲すといつても、その間に好まない事情が生ずるのは、人生にありがちな事實である。その好ましくない場合が生じた時に、自己の感情に打克ち、その目的の遂行を専らにするのが即ち努力である。

— 努力論 —

(一)京都府紀伊
郡。京都市の
南方二里半。
土偶人

二九 土器賣る翁

柳澤 淇園

伏見^(一)より年七十歳許なる老翁、土偶人、土器のたぐひを荷
なひて、洛中を賣りありくあり。常に商ふ家に来りて食事を
する折から、その家の奉公人大勢集り、かの翁にいひけるは、
「御身の荷なひたる物は、その價いかほどばかりの品にか。」と
問へば、翁答へて、「銀十五六匁ほどの荷なるべし。」といふ。又問
ふ、「京の町は人のゆきかひ繁き所にて、若し過ちて皆碎くま
じきものにもあらず。さやうの時はいかがする。」といへば、そ
れこそ過なれば、さる事なしとはいふべからず。さある時は、
その事をありのまゝに陳べて、我等も年久しく商ふなれば、

一荷ぐらゐは情にて借受けて商ひ申すなり。」といふ。又問ふ、
「その上にも又碎くまじきものにもあらず。その時は又いか
がする。」と詰りいへば、「いかに間屋なりとて、數度の無心もい
ひ難ければ、その折こそその許たちの如く、奉公なりとも致
すより外にせんかたなし。」といへり。

— 雲萍雜志 —

三〇 無線電信の發明

渡邊 忠吾

(1) Canada.
(2) 加太。ア
メリカ合衆國
の北。イギリ
スの領地。
(3) St. Lawrence
New-
foundland.

寒い北風がぴゆうくと吹荒む冬の或日のこと、いづれ
も二十五六の血氣盛の三人の青年が、カナダの東極端聖^(一)口
ーレンス灣の口を扼するニューフォンドランド島の東海
で、烈風に乗じて細い針金を附けた風を飛ばして居たが、風

が餘り強過ぎるので、何度となく針金が切れて、風は海の彼方へ吹飛ばされてしまった。この針金の一端は、何か知らんが或不思議な器械に繋いであるのだ變な事をする物好きな若者どもだといふ風に、彼等のすることを傍觀して居た燈臺の老信號手は、少時たつてから向ふに見える燈臺の方へ歸つてしまつた。

三人の青年は老信號手が歸つた後も、熱心に風を揚げて見たが、風が強過ぎたために、その日はとう／＼目的を達することが出來ずに、暫時厄介になつて居る燈臺へ引揚げた。その翌日もやはり器械と針金と風を持出して、前の日にした通り、風を揚げては何事かを試験し始めた。この日は前の



Guglielmo
Marconi.
イタリーの電
氣學者。一八
七四年生。

日とは違つて、風もそれ程強くはなかつたので、三人は一心不亂にこの仕事を繼續した。ところが間もなく、器械の側の卓子に寄掛つて、器械から連續してある電話の受話器を耳にして居た瘦形の凜々しい青年は、思はず「おいおい、來たぞ、來たぞ。確かに成功した。とん、とん、とんと三つ響いて來たぞ。」と、連の二人の助手を顧て微笑した。微笑した青年はマルコニであつた。二人の連はイギリスの本土から連れて來た助手であつたのである。今を距ること二十年前、千九百一十一年十二月十二日の午前十一時三十分

(Cornwall.
イングランド
西南部の州。

件の

彌蔓す

(i) Ether.

(ii) Heinrich

Hertz.

(西暦一八五
七年—
四年)

酸苦

(E) Bologna.

に、ちやうど二千哩を距てるコーンウォールの海岸から、大西洋を横斷して波及して來た無線電信の電波が、或裝置をした件の風を感じ、地上の器械に傳はつて、そして首尾よくマルコニの耳に響いて來たのである。彼はこの時二十七歳であつた。マルコニがかくの如く宇宙に彌蔓するエーテルを導體として、ドイツの物理學者ヘルツが發見した電波をば空中を通じて電信の用をさせるまでには、實に七年間の酸苦を嘗めたのである。

彼はイタリーのボロニヤ⁽¹⁾の産で、幸にも富裕で、そして賢明な父を持つた爲に、容易にボロニヤ大學に入學したが、彼はここで貪るやうに電波に關する知識を吸収し、そして大

學生時代に、すでに無線電信の發明に腐心したのである。

彼の創作した器械で、とにかく二哩の距離を隔てて通信が出来るやうになつた時、彼はこの器械を持つて、母の生まれた英國に渡つた。それはやつと彼が二十二になつたばかりの時であつた。それから幾多の苦心を積んで、今世紀第一年の十二月、大西洋横斷の電信が出来るやうになつたのである。その後無線電信電話が漸次に發展して、今では大陸間の通信は言ふまでもなく、軍艦、汽船、飛行機に至るまで、無線電信の器械を備へつけるやうになつた。人類はこの發明の爲にどれほど恩澤を蒙つて居るであらうか。一青年の力も偉大であると謂はねばならぬ。

——林檎の落つる音——

飛行機

白鳥省吾

飛行機二つはるくこ、
はじめて田舎の町に来て、
遠くへ飛んで行つた時、
みんなが寄つていひました、

「鳥よりも速いね。」

「雲よりも高いね。」

「乗つてゐる人はえらいね。」こ、
驚きながらいひました。

だれそれさんもいひました、

「飛行機で東京へ行きたいな。」

東京はごこ知らないが、
飛行機がよく知つてゐて、
私を連れて行くだらう。」

浦島太郎の龜のやう

行先をよく知つてゐて、

愉快な處へ連れて行く

そんな利口な飛行機が、

もしもこの世にあるならば、

私も乗つて見たいもの。

— 日本童話選集 —

三一 梁川星巖の妻

下田歌子

宗とし
斗とす
慷慨家

齷齪

婦工

梁川星巖は徳川末期に於ける有名な詩人で、文は山陽を
宗とし、詩は星巖を斗とすと並び稱せられた人であり、且な
かなかの慷慨家でありました。その妻は紅蘭とて、亦一種の
女丈夫でありました。紅蘭は美作國の豪家長谷川氏の女で、
幼少の時から男勝りといはれて居たのであります。何事を
するにも勝氣で、はきくして、小さな事に齷齪致しません。
十歳の時には、最早ちよつとした詩作ぐらゐは出來たと申
します。當時には珍しい學問のある女子で、そして婦工も一
通りは心得て居ましたので、星巖はこれこそ望むところの
良妻であるとして、自ら先方へ結婚を申し込みました。紅蘭の
家でも、星巖といへば名高い學者であるから、快くこれに應

黄道吉日

縁女

(一) 宋の周伯弼が
唐代の詩を七
言絶句、五言
律詩の三體に
分類して編輯
し書物

奇行

肝心

素養

じて、黄道吉日を選んで、めでたく興入を致させました。こ
ろが、いざ結婚式を挙げようといふ時になつて、星巖は思ひ
出したやうに縁女に對ひ、今からちよつと旅行して、三月許
の内に歸つて来るから、それまでに三體詩を諳記して置け。
と言つて、人々の止めるのも聽かず、飄然として出て行きま
した。詩人や歌詠には奇行が多いとは聞及んで居たものの、
これは又餘りに突飛な行だと、人々は大いに驚きました。
しかし肝心の縁女は何とも思はぬ様子で、その日からし
て留守を守り、裁縫や家事の暇ごとに、夫から申しつかつた
三體詩を出して來ては、熱心に諳記して居りました。もとよ
り記憶力も強く、漢學の素養もあるところから、さほど困難

晴山野水美清溪
又是陳柯撈羽翠時
木希失零秋花也
常中曉輝初漾其



紅蘭筆蹟

も感じませんで、間もなくそれを暗記してしまつて、今は心
安しと、夫の歸る日を待つて居りました。

ところが星巖は約束の三月を経ても歸つて参りません。

どこに何をして居るとも申して参りませんので、縁女はと
にかく、一家親類の者は、どうした事であらうと案じ暮しま
した。が、その内には歸るだらうと心頼みして、待ちに待暮す
間に、早く一年も過ぎ、二年も過ぎたのであります。何ほど待

風の便
のんき

嫁期

つても、風の便だにありません。いかに暢氣な人にしたところで、結婚前の妻を置いて、二年も三年も旅に出て居る者はあるまい。これは必ず途中でどうかたつたのであらう。若しさもなく、歸るのを忘れて居るやうな男ならば、連添ふ妻は誠に頼もしげない事である。どの道見込がないから、綺麗に暇を取つて歸るがよい。まだ婚禮前で幸であつた。嫁期の過ぎぬ間に、他に良縁を求めねばならぬと、父母までも切りに家に歸ることを勧めるやうになつたのであります。

けれども當人はこの忠告には反對で、斷然これを斥けました。その心の中には、果して夫星巖は途中で死んだのかも知れぬ。死んだとすれば、自分は最早未亡人として一生を送

うら若い

るべきものである。若し幸にして生きて居るのならば、一旦縁あつてこの家に嫁いだ以上は、いかやうな事があつても、自ら出で去るのは女の道でない。いづれにしても、自分一人が覺悟して居さへすれば濟む事であるとかやうに考へて、堅い決心をして居たのであります。しかし何と申しまして、も、まだうら若い女の事でありますから、たゞ一人ほの暗い燈火に對つた時には、さすがに夫の上を案じ、身の行末を思ひわびて、心に泣いた事もありました。

かくて又一年を経ました。花は咲いて、花は散つて、又も青葉の頃となりました。濕りがちな梅雨の空に不如歸と啼くほととぎすの聲は聞えても、夫の便は更にありません。父母

ゆくりな
くも

墨客

憧憬れる

は我が女の衰へ行く姿を見て、非常に氣を揉みました。されども當人の心は鐵石の如く、頑として少しも動きません。かくてちやうど四年目の秋の頃であります。今はなかなか憂さにも淋しさにも馴れし身の、待つほど過ぎては待つとしもなく、待たずともあらぬ夕暮に、ゆくりなくも星巖は飄然と歸つて参りました。詩人、墨客の常として、一度旅に親しみますると、彼處の花、此處の月と、それからそれへと憧憬れて、つい歲月の流れるにも心づかず、三歳の月日を旅の空に過したのであります。それでも出る時に申しつけた事は忘れなかつたものと見えて、家に歸るとすぐに、まづ「三體詩は諳記したか。」と問ひました。妻は夫の問に應じて、すらく

一條の話
堅忍不拔

と答へましたので、星巖も大いに喜び、ここに始めて、結婚の式を挙げましたのであります。この一條の話は、或は星巖ほどの人物でありますから、非常に堅忍不拔の志操を持つて居る妻ならでは持つまいと思つて、殊更に試したのであらうといふ人もあります。或はさうかも知れませんが、試験にしては、餘りに長い試験ではありませんか。又或説には、星巖は結婚を濟ませて直ちに行つたので、妻だけには得心させて出立したのだとも申します。

—日本の女性—

自修文

三二

清淨潔白

小ざつぱりとした木綿物は氣持がよい、新しい青疊は居心が

(一) Paeiz.
ドイツの醫
者。長い間帝
國大學に御雇
た。教師であつ

(二) 景行、仲哀、舒
明、齊明、天智
天皇。及び天武の諸
郡。馬縣群馬
(三) 馬縣群馬
(四) 兵庫縣有馬
郡。Königsmark.
(五)

よいといふ我が國民は、清潔を愛する民族である。隣國の支那人
などと比べては、大きな相違である。日本人のやうに盛に全身浴
をする國民は外にはあるまい。東京市の湯屋は千軒もあり、その
外、中流以上の家には各湯殿があつて、二百二十萬の住民の中凡
そ三分の一は、毎日入浴する割合だといふ事である。ベルッ
氏は、日本の氣候家屋の割合に、リウマチスの少いのは、全く日本
人が錢湯を好む結果だらうといつて居る。錢湯の起源は新しい
にしても、湯あみ、水あみの習慣は太古からあつたのである。且日
本全國到處に温泉のあることも、他國には例がないので、伊豫
道後の湯には天皇も行幸になつて、推古四年の道後の碑文は、我
が文學史中の最古文の一標本である。その外、伊香保有馬、箱根等
の湯は皆歴史上に名高いのである。ドイツ人のケーニグスマー
クといふ人の書いた「日本及び日本人」といふ書の中には、日本人

(一) Sittgen.
プロシヤ州の
町。

の入浴の事を賞揚して、これだけは大いに眞似すべき事と書いて
ある。ベルリン市などでは公衆衛生の必要から、到る處に浴場
を公設して、労働者等の入浴を奨励して居る。余は或夏田舎の冷
泉浴場に遊んで、夏の事として日々入浴したが、同行のドイツ人は、
どうしてもはいらうとはいはぬ。全身冷水摩擦をやれば、別に入
浴の必要なしといふ論である。同人の言に、日本人の短命なのは、
恐らくは温浴を好む結果であらうなどと言つて居つた。ジッチ
ンゲンといへば、人口八千ばかりの町であるが、そこには一軒の
湯屋もない。或滑稽雜誌で、若夫婦が新宅を探し歩いて、家主と問
答中、家主が「ここには湯殿もついて居る。」といふと、亭主の答に「な
に、我等はめつたに病氣にはならぬから、湯槽は入らぬ。」といふ話
を見た事がある。病氣にでもならなければ湯に入らぬ積と見え
る。中學校の讀本に日本人の記事を掲げて、入浴の事を記し、「ドイ

(一) 西暦一六一八年
つた戦争で起
六四八年まで
續いた。
復古
もどきほりに
すること。

(二) Hamberlain.
イギリス人。
日本學者。東
京帝國大學文
學部名譽教授。

黄泉國
死んだ人の住
む國。
(三) 日向國。宮崎
郡。橋村附近。

ツもむかし^(一)三十年戦争までは盛に入浴したが、その戦争の疲弊後、この風が廢つたので、これは復古すべき事である。」と書いてあるのも見た。日露戦争の最中でも、日本軍人の最も不自由に感じたのは、入浴の不便の事であつたらしい。とにかく日本人は身體を綺麗に洗つて、さつぱりとすることが好きである。清淨は日本の特性であるとは、西洋人の日本人に關した記事には必ず書いてある。チェンバレン氏は、日本は多くの事柄を支那から輸入したが、これだけは日本特有だといつて居る。支那あたりから來れば、殊にその差異の著しいのに感ずるであらう。

日本人の全身浴は伊弉諾尊の神話に現れて居る。伊弉册命がお隠れになつたのを黄泉國に行つてのぞいて、汚いものを見たといふので、憶原^(三)で御禊をなされた。御禊は身そゝぎで、身體を清淨に洗ふことである。目に見たばかりで身體が汚れるといふの

潔癖
爽快
氣もちのよい
懺悔
罪をくいるこ
神遣
神から追ひや
られること。
贖罪
罪をつぐのふ
こと。
祝詞
祭や、はらひ
の神に申し
上る。神に
あはれを
祈る。その
御所。京都の
正門。朱雀門
今葛野郡。西
野村大字。西
京小田車阪第
一番田地の内
といふ。
早川
流の早い川。

は、潔癖の甚だしいものといはねばならぬ。すべて上代の日本人は、身體の汚も、精神の汚も殆ど同一に考へて居つて、身體を清淨にすれば精神も自ら綺麗になると考へたのである。我等の入浴して垢を洗ひ落した後は、精神も自ら爽快になるから、かう考へたのも自然である。それで、若し道德上の罪惡を犯した者でも、身滌をすればその罪が消えて行くのである。多くの宗教で懺悔をすれば罪が消える。と考へたと同様、身滌をすれば罪が消える。と考へたのである。素戔鳴尊が神遣に遣はれ給ふ時は、鬚を切り、爪を抜かせられたので、これは贖罪の爲である。このはらひの思想は、祝詞の大祓詞によくあらはれて居る。これは毎年六月十二月、皇城の朱雀門で行はれたので、天下の萬民が、知らず識らずの間、に犯したすべての穢や罪をはらふ爲である。その文を見れば、人々の罪はまづ河水とともに流れて行つて、早川の瀬に居る瀬。

恒例 きまりとして
行はれるこ
と。
(一)風のそよぐ
と吹くならの
小川の夕方は
誠に涼しくて
夏といふ思はれ
ないが、みそ
ぎを行ふの
で、あゝ夏だ
と思ふと意

織津姫といふ神が大海に持出す。そこでは速開都姫といふ神が、これを一呑にのむ。それを氣吹戸主といふ神が根の國、底の國といふ汚い國へぶうつと吹放つてしまふ。根の國、底の國に居る速佐須良姫といふ神は、これをどこかへやつて、なくしてしまふ。かういふ風に、すべての罪が郵便物のやうに順々に神たちの手に渡つて、遂に大海へさらりと流し捨てられるのである。この祝詞の中には、身體の汚のみならず、色々な罪惡も數へてある。即ち一年に二度づつ、半年間の汚を流してしまひ、忘れてしまつて、又新しい生活をしようといふのである。これは恒例の祓であるが、その外に臨時の祓といふものがあつた。又朝廷のみならず、民間でも祓の式を行つた。中古の物語日記には、祓の事があちらこちらに見える。百人一首の

風(一)そよぐならの小川の夕暮は

形代
人のかたち
餘波
のこりもの。

みそぎぞ夏のしるしなりける

も六月の祓である。菅や茅で輪の形を作り、その輪を潜ることは、今も神社で行つて居る。紙で形代を作つて、それに男女の別、年齢を記して祓ふことも、現今行はれて居る。皆昔の餘波である。

三三 家の紋

余は曾て羽織袴で西洋人の饗宴に招かれた時、主人から紋の由來を問ひたゞされた事がある。又先年日本へ來た支那の教育家から、或處の宴會で、同じく紋の起源に就いて質問を受けた事がある。日本服の三つ紋、五つ紋は、外國人の目からは餘程不思議に見えるのであらう。

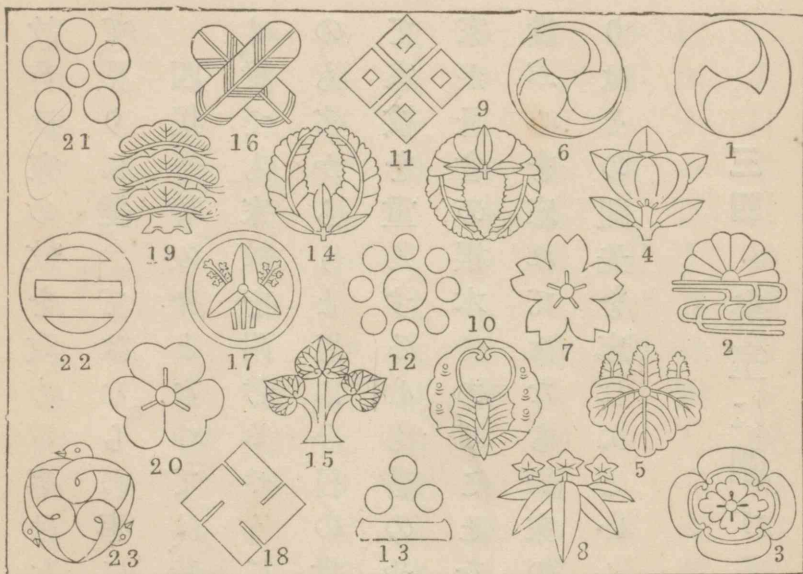
先哲

徽號
冠婚葬祭

家の紋の起りは古いことではない。大凡鎌倉以後ぐらゐのことであらうといふ先哲の説がある。元は旗幕などに附けたのであるが、後には段々素袍、直垂、小袖などにも附けるやうになり、自らその家の徽號となり、後には冠婚葬祭の禮式の時には、必ず紋章の附いた着物を着ることになった。今日では大禮服をはじめとして、通常禮服としては燕尾服を用ひ、通常服としてフロックコートを用ひる等、洋服を本として禮装を定められたから、公の禮服には日本服を着る場合はないが、民間の交際では、紋のある羽織又は小袖は、自ら禮服のやうになつて居る。

家紋の發達は武家以來のことであつて、武士道とともに

家系



23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
結び三ツ雁金	丸に二ツ引	星梅鉢	かたがみ	三角立	丸にが	ちがひ	立上	三ツ星	九ツ星	四ツ星	備下	龍	三ツ七	五ツ七	橋	木	菊	二ツ				

益、發達したに違ない。武家時代にはその家系を重んずる風が盛であつたから、その家紋によつて先祖の事蹟を忘れず、先祖傳來の家名を墜すまいといふ考があつたのである。それ

故昔は家の紋を改める事はなか／＼やかましい事であつて、猥りに變へてはならぬ事になつて居つた。

四民平等の今となつては、昔の武士の後裔ばかりではなく、誰でも家紋を附けるやうになり、新しく紋所を工夫したのも多からうと思ふ。今日の世の中は家祿の制もなく、随つて家紋を重んずる心も昔のやうではないが、我が日本では家が社會の根本であることを思へば、亦舊來の家の紋所を貴ぶ心を忘れてはならぬ、家の紋を貴ぶといふことは、つまりはその祖先を忘れぬといふことである。

三四 皇室に關する敬語

すめらみこと
うちつけに

大元帥

臨幸

大日本は神國なり。神孫相繼ぎて、萬世一系の皇位を踐み給ふ。かみは上又は神にて、天皇は上即ち神にまします。現つ御神と稱へ、現人神と申し奉るもその故なり。すめらみことは天下を統治し給ふ御方の義にして、みかどと申すは、うちつけに御身の上を申すを憚りて、宮門を指していへるなり。漢語を用ひては天皇、皇帝、至尊、聖上、主上、今上等と申し、また陸海軍を統率し給ふより大元帥と申す。高御座、天位、寶祚、宸極等は皇位を申す語なり。

みや(御屋)、みくるま(御車)、みゆき(御行)の如く、みを冠して敬稱とし奉ること多し。みゆきを行幸、臨幸といひ、還りますを還幸、還御といふ。太皇太后、皇太后、皇后、皇太子、皇太子妃のい

でましを行啓といひ、還りますを還啓といふ。又皇族方のいでましを御成といふ。

みくるまを車駕、龍駕といふ。乘輿、鳳輦、鸞輿は御輿なり。故に「鸞輿、いづくにまします」車駕某地に幸す。などいへば、やがて天皇を指し奉る語となる。

みやは御居處なり。九重、内裏、御所、皇居、宮城といひ、又禁中、禁裏、禁廷、禁闕、鳳闕ともいふ。行幸の間しばし留らせ給ふを駐蹕又は駐輦といひ、そのおはします處を行宮又は行在所といふ。鹵簿は行幸啓の行列なり。

天皇の御見聞、御感想、御思慮を稱し奉るにはみそなはず、聞し召す、思し召す等の古語の外、漢語にては天聞、天聽、天覽、

駐蹕
鹵簿

天德、叡感、叡聞、叡慮、聖聞、聖旨、聖鑑、宸襟、宸慮の如く、天、叡、聖、宸等の語を冠すること多し。又御尊體、御容貌、御動靜に關する敬語として、玉體、龍體、天顏、龍顏、玉步等を用ひ、御寫眞、御畫像には御影、聖影といひ、御座を玉座といひ、臨時の御休憩所を便殿といふ。

天機

儲嗣

天皇の御言はおほみこと、みことのり、又上諭、勅諭、勅命、勅語、綸言、宣旨、御沙汰等と申す。宸翰、宸筆は御書なり。御作の詩歌を御製といひ、御盃を天盃といひ、御機嫌を天機といふ。皇太子を東宮と申し、又春宮、儲嗣、儲君、儲貳と申す。皇子孫の生まれさせ給ふを降誕といひ、内親王、女王の臣下に嫁し給ふを降嫁といふ。

寶算、聖壽は天皇の御齡なり。天皇及び三后のかくれま
すを崩御といひ、皇族には薨去といふ。

天皇及び三后の敬稱に陛下、皇族の敬稱に殿下を用ふべ
きは、皇室典範に明らかなり。

かくの如く、皇室に關する敬語は極めて豊富なり。上古皇
室にのみ用ひたる敬語にして、めす、おぼす、のたまふの如き
は、中古以來或は攝關に、或は將軍に、なほ廣く移りて一般貴
人に對する敬稱となりたれども、その大部分は儼として使
用を誤ることなし。これ君臣の分明らかなる我が國體の然
らしむるところにして、他國にはその類例を見ざるなり。

攝關

儼として

— 國定高等小學讀本 —

三五 近江聖人の幼時

村井 弦 齋

雪ならば幾たび袖を拂はまし

はなの吹雪の滋賀のやま越

それは彌生の春の頃、櫻狩して行く道の、眺も飽かぬ旅な
れども、これは習はぬ冬の旅、花の吹雪のそれならで、霏々た
る雪は路を没し、凜冽たる風は膚を裂く。

辛苦の中に滋賀の山を打越ゆれば、滿目蕭條たる湖上の
風景。辛崎の松は暮靄朦朧の間に隠れて、堅田に落つる雁の
聲のみ寒く鳴き渡る。見渡せば白雪皚々たる比良の雪、今よ

(一) 滋賀縣滋賀郡
滋賀村の山

櫻狩

滿目蕭條
(二) 唐崎夜雨、
堅田落雁、比
良暮雪各八景

(一)滋賀郡。

(二)滋賀縣高島郡小川村。

りこの山路に掛らば、山中にて日は暮れん。疲れし足の進み難きに、坂本の邊にて宿を求めんかと、獨旅の少年は前路を睨んで、暫く湖畔に立ちたりしが、良ありて思ひ返し、彼の山を越ゆれば我が故郷、今一息にて母君の許に着くなるに、何とて空しくここに留らん。夜にてもあれ、朝にてもあれ、家に歸らば疲も厭はじ。いで、心を取直し、今宵の中にこの山を越えんものを。」と再び足を踏みしめて、薄暗き山路へこそは掛りけれ。

痛はしや藤太郎、母に逢ひたき一心より、踏みも習はぬ山路を、杖にすがりてたゞ一人、たどりくゝて行く道の、岩につまづき木の根に倒れ、血さへ足より流れ出で、道の邊の雪を

彌増す寒さ



中江藤樹

紅に染めながら、なほも心を勵まして、風雪の中を登り行く。やがて日は暮れたり。闇の夜ながら雪明に路は見ゆれど、彌増す寒さは骨に徹りて、手も足も凍るばかり。一山寂莫として、耳に答ふるものとは、閉ぢし氷の下潜る細谷川の水の音、杉の枯葉を鳴らす風、或は積雪梢を壓して、枝折れ雪の落つる響など、幽にももの凄く聞えて、怖しとも悲しとも譬へんやうなし。かゝる難處と知りもせば、麓にて一夜を明かし、ものを旅慣れぬ身の悲しさ、足に任せてこの深山路へ掛りしが、今は足疲れ身體凍りて、先へも出でられず、後へも戻られず。少年

進退谷る

は進退谷りて、半ば死せる者の如く、松の根方に打倒れたり。起きも得上らず、少時降る雪を恨めしげに眺めてありけるが、腹は次第に餓を感じて、寒さは一入身にしみ渡り、眠ることもなく死ぬともなく、前後も知らずなりにけり。

懐かしの故郷や。藤太郎は昔覚えし山川草木を眼の前に見て、忽ち足の疲も打忘れ、路を急ぎて我が家の方へ向ひけり。夜は漸く明けたれども、雪天の寒さに閉ぢられてや、道々の家は未だ多く起出でず。かの家は我が友の家なりけり。この家には我に優しき老人ありきなどと、昔の事を想ひ出でて、すべろにあはれを催しつゝ、須臾にして我が家の前に來れり。

衡門

脩竹

見れば、衡門舊に依つて立ちたれども、半ば雨に朽ちて、復昔日の觀に非ず。柱も傾ける所あり。築地も崩れたる所あり。前庭の古松、刈る人なければ枝繁れり。脩竹一叢思ふまゝに根を延して、彼方此方に生出でたる若竹は、雪に堪へざる風情あり。玄關の戸は未だ開かず。母人は未だ起出で給はぬにやあらんと、築地の陰より内に入りて、勝手の方を見れば、車井のきしる音さも寒げに聞えて、何人か水を汲めり。姿は確かに母人なり。少年は忽ち胸塞がりぬ。昔は許多の男女を召使ひて、勝手などに出でられし事なき母様が、この雪の朝の寒天に、自ら車井の水を汲み給ふか、情なしと、湧出づる涙禁め敢へず。急ぎ車井の側に駈行きて、後よりその袂を引き、母

様、私が汲みませう。」と涙ながらに取りすがる。

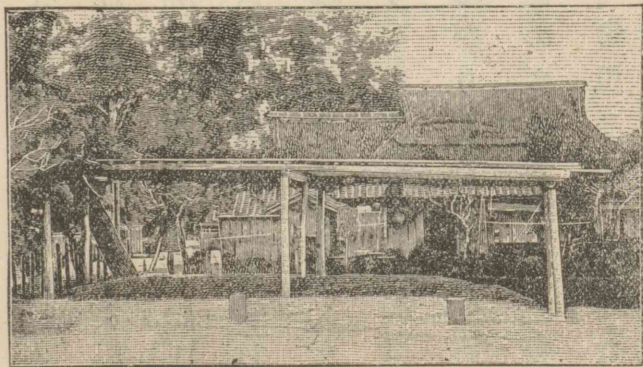
事の不意なるに母は驚きて振返り、誰か。藤太郎。どうしてここへ。藤太郎は細き聲、はい、母様の御手助を致しに参りました。まづ内へお入り遊ばせ。おつむりに雪が掛ります。」と孝子の真情、片時も母をこの雪中に立たしめざらんとす。母は車井の綱をしつかと握りしまゝ、石の如く立てり。叔父様とでも御一緒か。「いえ、一人で御座います。母は聲を勵まし、叔父様が一人和郎をお出しなされたか。「いえ、叔父様には知らせずに参りました。母は眉を揚げ、怪しからぬ。何故そんな事を。さあお話しなさい、和郎が歸つたわけを。いえ、ここで聞きませう。聞かないうちは、めつたに家へは入れません。」颯と吹來

和郎
眉を揚ぐ

る朝風に、地上の雪はくるくると捲揚げられて、横に二人の顔を撲つ。

藤太郎は歸りし次第を物語りぬ。

母は我が子の優しき心根に、すゞろ涙に咽びしが、忽ち思ひ返しけん、わざと言葉を勵まして、和郎はこの母の言葉を忘れましたか。和郎を叔父様に頼むとき、一旦國を出たからは、あつぱれ立派な人にならないうちは、決して途中で歸るなど、あれほど堅く言聞かせた事を忘れましたか。この母が難儀を忍ぶの



中江藤樹遺愛の藤とそ住宅

(一)愛媛縣喜多郡

默然

なまなかに

も、たゞ和郎を立派な者にしたいばかり。立派な者にならな
いで、家に居て手助をしてくれたとて、何のそれがうれしか
らう。一人で來たものなら、一人で歸れぬことはあるまい。母
は再び逢ひません。その足ですぐ大洲へお歸りなさい。」
餘りの事に、藤太郎は默然として言葉も出でず、力抜けて、
雪の上に跪きぬ。母はその失望せる様子を見て、痛はしき胸
に満ち、かくまで我が身を思つて來りしものを、百里の道の
一人旅、定めて憂き事も、つらき事も多かりしならん。せめて
一日なりとも家に入れて、旅の疲を休めさせんかと、恩愛の
情に心も亂れんとするを、忽ちにして復思ひ直し、なまなか
に弱き心を見せなば、修業の邪魔。獅子は子を千仞の谷に落

聲を吞む

すと聞くものを、和郎は母の言ふ事が解りませんか。」と、強く
は叱れど、聲は沾みぬ。
藤太郎は落つる涙を拭ひつゝ、頭を垂れしまゝ、微なる聲
にて、「はい解りました。」それなら今から歸りますか。藤太郎は
悲しき聲、「はい歸ります。」と素直に言ふ。母は素直に答へられ
ては、なほ更腹の絞らるゝ思。遂に堪へかねて忍泣き、袖咬み
しめて聲を吞む。藤太郎は屹として立上れり。母様、この薬は
鞆の妙薬で、世にも得難き品。これ差上げたいとわざ／＼持
つて參りました物。これだけはお取りなされて下され。」と、新
谷にて得し薬を差出す。母は快く、「おゝ和郎の志、これだけは
受けませう。」と手に取らんとて下を向く。藤太郎は渡さんと

路悠々

佳話

て上を向く。見合はす顔、互の眼には涙一杯。母は耻づかしと、じつと耐ふる心の苦しさ。子は堪へざりけん、薬を手より取落してうつ向けば、雪の上にほろ／＼と落つる涙。

雪はなほ霏々たり。母が汲置きし水を見れば、いつの間に張りけん、上は一面の薄氷となれり。藤太郎は遂に心を勵まして、泣く／＼我が家を立出でたり。見送る母、見返る子。満天の風雪路悠々。

—近江聖人—

三六 キャベル嬢

歐洲大戦亂に際して、女子が國事に盡せし佳話少からざ

(Teilh Cavell)
(西曆一八六
六年—
五年)
聳動す

(二)大正四年。

拘禁

斡旋

無辜



嬢ルベヤキ

るが中に、イギリスの看護婦(一)キャベル嬢の死ばかり、世界の耳目を聳動せるはなし。キャベル嬢は看護婦としてベルギー國のブリュッセルにあり、故國に忠實なる心より、英佛白聯合軍の爲に計るところ多かりしかば、(二)千九百十五年八月五日遂にドイツ軍に拘禁せられ、同十二日死刑に處せらるゝに至れり。これより先、嬢が拘禁の報あるや、諸中立國の公使は嬢を救はんと熱心に斡旋し、各國の新聞紙皆筆を揃へて、嬢の無辜なるを訴へしが、狂暴なるドイツは毫もこれに耳を貸さず、名花一輪空しく國家の儀

牲と散り畢りぬ。

嬢が死刑を宣告せられたる後面會せし唯一の人は、イギリスの僧侶にして友人なるカパンなり。嬢は意氣凜然、カパンに語りていふやう、

「私はけふ恐れもいたしません。たじろきもいたしません。私はもういく度も死を見ました。死は私にとつて珍しくも、恐しくもありません。」

といひ、又

「私は今神と永遠との間に立つて、愛國の至情があるばかり、何人に對しても、憎惡の念や、冷酷の心を持つて居りません。」

たじろく

自ら決す

といひて、平然として深く自ら決するところあり、カパンの別を告げて、「さやうなら。」といふや、

「私どもは再び逢ふことがございませう。」

と言ひて、堅き信仰の色面に溢れたりといふ。

自修文

三七 さすらひの皇后 下田次郎

歐洲大戰の初、數百萬のドイツ軍ははや潮のやうにベルギーになだれ入つた。勇敢なベルギー軍も終に追詰められて、海岸の要塞であるアンヴェルスに立籠る外はなかつた。この國內でドイツ軍の與へた慘害は、思ひ出しても身の毛が立つ。そのアンヴェルスから船に取附いて、英國に遁げる避難民の不安の色と取亂した姿。その中に、十四と十二になる兩皇子と九つの皇女の手

なだれ入つ
たどつとおし
せた。
[Anvers]

(Elizabeth.
悄然として
てしなくとし

安泰
事やすら。無
硝煙彈雨
火藥のけむり
や彈丸の雨。

を取つて、當國の皇后エリザベス^(一)が、悄然として乗りこんでゐられたことを誰が知らう。

この皇后たちを迎へたロンドンの群集は、御身分が知れてお姿を拜すると同時に、皆頭を垂れて、一語を發する者もなかつた。でも、人々は、かうしてすべてが安全なロンドンで御靜養が出来るといふことを、せめてもの御慰安だと思つてゐたのであつた。

ところがその數日後の新聞は、ベルギーの皇后が再びアンヴェルスへ向けて御出發になつたことを報じた。心あるものは、この記事を讀んで思はず涙ぐんだ。げにこの皇后がロンドンへお渡りになつたのは、決して御一身の安泰^{あんたい}を考へられてではなかつた。珠にも換へられない大事のお子たちを、硝煙彈雨の下に曝して置くに忍びないので、それを英國に託したいお心からであつたのである。今や英國の朝廷はそのお子たちを確かに預つて

切に
しきりに。熱
心に。

(Albert.
敢然
おもひきつ
て。

大義
人として取る
べき重大な義
理。

くれた。もはや皇后のお心にかゝる何物もない。隨行の人も、英國の人も、このまゝ、ここにお留りあるやうに切にお勧めしたけれども、それによつて翻し給ふやうな御決心ではなかつた。今しも祖國なるアンヴェルスの陣頭に、親ら劔を執つて戦ひ給ふ國王アルベルト陛下と運命をとみにすべく、敢然兵火のたゞ中へ再び赴かせられたのであつた。

雄々しい皇后のお心には、同時に正しい判斷の力があつた。皇后はもとドイツの一皇族の出であつた。現にその兄弟たちは皆ドイツ軍に従ひ、その一人は實にこのアンヴェルス攻撃軍の司令官であつたのである。戦争の初、皇后が一般から疑の眼で見られてゐたといふのも當然である。この場合、弱い婦人だつたならば、一室の中に泣暮してゐたかも知れない。義理に迫られて自害したかも知れない。判斷力の鈍い人だつたならば、大義^{たいぎ}を誤る

至當
あたりまへ。

重圍
いくへにも取
りかこまれた
かこみ。

行在所
りりの皇居。

假寝
うたれ。

居てもいい。皇
事し心配もい
落ちつないの
いふ。

微笑
ほくそめ。

塹壕
ほくそめ。

敵の彈丸から
身をまもるた
めに掘つたか
らほり。

やうなことがあつたかも知れない。それにも拘らずベルギー國
人がこの皇后に對して敬慕措かない有様であつたのは、もとよ
り至當のことである。皇后は飽くまでも強い心と正しい心の持
主であつたからである。

重圍を受けたアンヴェルスの要塞の中に、再び御身を投ぜら
れて後の皇后には、半日として安い時はなかつた。軍隊の慰問、傷
病者の看護、窮民の救済に、御身を忘れて御奔走遊ばされた。アン
ヴェルス陥落後も、國王とともにいつまでも戦場をお去りにな
る風はなかつた。その國王の行在所に絶えず落下するドイツ飛
行船の爆彈が、幾夜假寝の御夢を脅し奉つたことであらう。さう
した中でも、皇后のお顔にはいつもながらの御微笑があつた。そ
れは人の心を和げ慰めずには置かないやうなものであつた。ベ
ルギーの兵士たちが、戦線の背後で、塹壕から塹壕へ、病院から病



さすらひ
たよりなくさ
まよふこと。

馬蹄に蹂躪
さる
兵隊に荒され

漂泊
さすらひ。

院へと廻つて歩かれる皇后の窺れたお姿を見ては、互に眼を見合はせて、「それ、さすらひの皇后様が。」といつては、すぐに涙を流すのであつた。

しかし、ドイツ軍の馬蹄によつて、見る影もないまでに蹂躪されたベルギーの國家は遂に救はれた。それは、一つは、弱い女性ではあつても、強くあるべき時に強かつた皇后、勇氣、果斷、親切、貞操の諸徳を具へられてゐる漂泊の皇后のお力によつてであつた。

— 女子新修身書 —

三八 大海原

坪内逍遙

大いなるかな、大海原。

朝に、夕に、ごう／＼と

動き、轟き、夜もすがら、
大浪、小浪寄せかへる。
いづこに打たぬ浪を見ん。
いつ浪の音を聞かざらん。
大いなるかな、大海原。

世界の山々ここへく
崩すとも、海は埋るまじ。
世界の川々絶間なく
注げども、海はここしへに、
不増、不減の瑠璃の色。
長閑けきさまは海にあり。

蓬萊山もよ
そならず

はやて

風風ぎはてし春の沖に、
おぼろにうつる月見れば、
荒ぶる心も風ぎぬべし。
松島かげの朝ぼらけ、
蓬萊山もよそならず。
凄じさはた海にあり。

春秋二季の大あれに、
はやて起つて、浪立てば、
甲鐵艦も木の葉と漂ひ、
大高潮のさかまけば、
村々流れて跡もなし。

山はくづれ、川は涸れ、
國興亡し、人變り、
陸には古今の別あれど、
海原のみは、開闢の
神代のすがたそのまゝに、
動き、轟き、寄せかへる。

女子新國文 卷四 終

通用字及び正字對照表

(茲に其の主なるもののみを擧ぐ。本
書には主として通用字を用ひたり。)

劔	剪	刃	函	減	涼	準	況	決	冒	兔	免	佞	仞	兩	通用正
劍	剪	刃	函	減	涼	準	況	決	冒	兔	免	佞	仞	兩	通用正
冤	墻	塚	場	噴	噐	唇	叙	収	厨	卿	卿	即	効		通用正
冤	牆	冢	場	噴	噐	脣	敘	収	廚	卿	卿	即	效		通用正
拔	拿	戲	懺	懺	懺	恒	往	稟	屏	并	帽	尅	寶	寇	通用正
拔	拏	戲	懺	懺	懺	恆	往	稟	屏	并	帽	剋	寶	寇	通用正
濱	溫	氷	殲	欸	概	桿	晉	昂	既	整	携	攢	擯	插	通用正
濱	溫	冰	殲	欸	概	杆	晉	昂	既	整	攜	攢	擯	插	通用正
盃	鼓	痴	畧	留	畫	瑣	玄	猫	猪	猿	熔	陰	潛	濶	通用正
杯	鼓	癡	略	畱	畫	瑣	玄	貓	豬	猿	鎔	陰	潛	闊	通用正
纖	纈	續	紀	穀	粘	籤	纂	節	笄	竊	秘	頤	穎	研	通用正
纖	纈	續	紀	穀	黏	籤	纂	節	笄	竊	祕	頤	穎	研	通用正
厠	勅	冲	効	俟	京	亡	並	萬	脉	聳	耻	羗	羗	羗	通用正
廁	敕	沖	効	埃	京	亾	並	萬	脈	聳	恥	羗	羗	羗	通用正
婚	姉	妍	妊	野	坂	囁	叶	厮	莽	艷	館	舖	阜	致	通用正
婚	姉	妍	妊	埜	阪	囁	協	厮	莽	艷	館	舖	阜	致	通用正
考	慙	富	忘	庵	嶋	峯	峩	岳	記	解	霸	褒	衛	蔭	通用正
攷	慚	富	忘	菴	島	峰	峨	嶽	記	解	霸	褒	衛	蔭	通用正
概	槁	楫	棕	基	案	柿	村	普	軟	賡	贊	賓	象	讎	通用正
槩	槁	楫	棕	基	案	柿	村	普	軟	賡	贊	賓	象	讎	通用正
砧	睹	狸	貉	無	烟	汗	毘	朴	馱	隸	隙	間	鎖	鄰	通用正
砧	視	狸	貉	无	煙	汚	毗	樸	馱	隸	隙	閒	鎖	鄰	通用正
緇	總	網	紕	糾	棕	筍	競	稿							通用正
褌	總	網	紕	糾	糲	笋	競	橐							通用正

本來ハ異字ナレドモ同字若シクハ略字
トシテ往々混用セラル、モノ。其ノ中
*標ヲ附シタル文字ニ限リ、慣用ニ從
ヒテ強ヒテ區別スルニ及バズ

ワタル。「連互」
桓ニ同シ。

笨ニ同シ。アラシ、龕、粗。
カラダ。

タバシ、タバ。但馬
ツタナシ、拙劣。

ミダリガハシ、猥。
自分ヲ越エテオゴル「僭越」

カブト。兜。「甲冑」
ヨツギ、嫡子。又子孫。「胃裔」

拓ニ同ジ。オス、ヒラケ。
ヨル、タノム、エダヌ、カコツケ。

ハラフ。又アグ。
ニナフ、カツグ。

鬼ヲ追フトイフ星ノ神。
アラタム。

ヤリ。

鏑ニ同シ。鐘ノ聲ノ形容。

アキビ。「欠伸」
カク。「缺席」

ホソイト、細糸。
イト。

又那ノ地名。
ヲラヤム。

カナフ、叶
オビヤカス、脅

サス。○ 刺殺。刺客。名刺」
モトル、ソムク、垂戻。○「亞刺比亞」

星ノ名。又敬意ヲ表スル爲ニ語ノ上ニ添フ。『台覽。台臨』
ウテナ、ダイ

ノチ、アト、ウシロ、シリヘ、オクル。
キミ。『皇后』

アキナヒ。
モト、本。

ツボ。
ミチ、宮中ノミチ。

ツ、シム。
ヒメ。

魚介類の總稱。又マムシ。
ムシ。

ヲビ、ヲブ。「諾狀」
訖ニ同シ。アザムカ。

ヘツラフ。
ウタガフ、
疑。

アカシ、シルシ。『證明』

禮ノ古字。

マデ。

エラブ。(ヨリトル)
エラブ。(書物ヲ編纂ス)

卻^{ギキ} 卻^{ギキ} 卻^{ギキ}
シ、リ、ノ、ク。退卻
シ、ロ、ロ。鏡
キ、タ、フ。鍛鍊
鍛^{タン} 鍛^{タン}

宛 字 (左の如き字は假名を
使用するをよしとす)

おぼつかなし 覺束なし
かひ (詮の意) 甲斐
きつと 屹度
さすが 流石、遺
しまふ 仕舞ふ
せつかく 折角
だけ 丈
だめ 駄目
ちやうど 丁度
ちよつと 一寸、鳥渡

附 錄 終

でたらめ 出鱈目
とうく 到頭
とかく 兎角、左右
とて、とても 迎
とにかく 兎に角
なか／＼ 中々、却々
ふるまひ 振舞
はかなし 果敢なし
ほんたう 本當
むだ 無駄
むづかし 六ヶし
やたら 矢鱈
やはり 矢張

大正十二年十一月十日 印刷
大正十二年十一月十三日 發行
大正十二年十二月十二日 訂正再版印刷
大正十二年十二月十五日 訂正再版發行

女子新國文典附

定 價	
自卷一各金四拾貳錢 至卷四各金四拾貳錢	大正臨時 四時 自卷一各金七拾六錢 至卷四各金七拾六錢
自卷五各金四拾錢 至卷八各金四拾錢	年度 自卷五各金七拾貳錢 至卷八各金七拾貳錢

著 者 芳 賀 矢 一

印 刷 者 兼 東京市神田區通神保町九番地
合資 富 山 房

代 表 者 合資會社富山房社長
坂 本 嘉 治 馬

印 刷 所 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
株式會社 秀 英 舍

發 行 所

(明治二十九年
六月設立)

東京神田

合資會社 富 山 房

電話神田三〇一四、三六六三、三七六〇番
振替口座東京五〇一〇番

広島大学図書

2000039915



amato